



西游漫筆



予が見たる所に於て充分に予が了會せる
 所となれる者既に甚た多からず、且予が眼
 を通りし所の實に露西亞及其人民の極小
 部分に過ぎざるは、予も亦よく之を知る。さ
 れど予に觀察の能力あり、また予が判斷の
 健全たるは、予の固より自ら信する所なり
 とす。

ドクトル、プランデス著「露國雜感」序

目次

同人に留別す	(明治三十一年)	一
西航の記	(同)	七
郷友に寄す	(同)	四十五
客窓瑣談	(明治三十一年、二年)	六十七
家庭行事	(明治三十二年)	九十七
或問	(同)	百三
中歐めぐり	(同)	百十七
後の中歐めぐり	(同)	百七十七

臨江錄	(明治三十三年)	百八十九
獨逸の學生	(同)	二百十三
散雲漫艸	(明治三十二、三、四年)	二百三十一
巴里たより	(明治三十三年)	二百七十七
一寸の心萬斛の愁	(同)	二百九十三
南歐日録	(明治三十四年)	三百一
烏王國の五旬	(同)	三百五十五
英國教育の得失	(同)	三百六十九
再ひ大陸に遊ぶ	(同)	三百八十三
露國雜觀	(同)	四百七

新大陸	(同)	四百三十五
歸航の記	(同)	四百四十七
田舎の説	(明治三十五年)	四百六十三

目次	卷首
後序	卷尾

同人よ留別す

明治三十一年八月、水城生社會學研究の爲滿三年間海外留學の官命を領し、其三日を以て將に征途に上らむとす。平生交遊の同人諸君、生が頑鈍を以てせずして、明は過溢の推獎を寄せ、勵ますに意氣を以てし、贈

るに丹心を以てし、其行色を壯にする所以の者、復至らざる所なし、是れ生が尤も感佩に堪へざる所、平生の投合之をして然らしむる者あるに由ると雖も、抑々亦重任と遠道とに顧みて、生に求むるに弘毅の志氣を以てする有るに非ずんば、安ぞ能く懇款と惻切とを極めて斯の如きに至るを得むや、蓋し惟ふに世界文明の進程や、日伸月長曾て頃刻の停滯を容さざるも、而も人心の覺醒と革新とに於いて、數十百の年所を經由

して蘊蓄積聚せる所の者、乃ち時に決然として快駛し、廓然として疎通し、世界の面目時に一新の觀を呈するは、史蹟に通達する者の毎に以て興會の處と爲す所たり。今や第十九世紀は剩す所僅に二年、日月の流るゝや、世は更に第二十世紀の新紀元に向うて趨らむとす。此多事多故なる一百年の歴史に於いて世界が贏得せる所の功過は、泛く東西古今の史蹟に看て實に其匹儔を絶する所なるも、約して此世紀に於ける世界文明の成果を擧ぐる、第十九世紀は未だ自ら自個の解釋を完了せずといふ一句に歸す可く、輒近數年の間、歐西の學界、先憂の鴻學が或は暗に或は明に稍稍として意識の指示に隨うて行働せる所以の者、亦粗く這般自個解釋の方途に向ふあるに似たるは、良に以なしとせざるなり。夫の社會學研究と稱する者、世の職職者流は、徃徃所謂科學的研究の一分枝を以て之に擬せむとするも、其眞摯深奥なる意義は、實に世界文明の

發達史上、第十九世紀の眞正確實なる解釋を完了せむとする、第二十世紀の至高至大なる天職に向うて、確乎たる豫言を與へむと擬する者に外ならず。水城生本と一介の窮生、叨に自ら揣らず、敢て斯重任遠道に向うて聊か一事の微功を寄せむと期す、疎狂の譏は年來既に之を聞くに慣れたる所、待つ所は唯千秋の知己に在るのみ、同人諸君乃ち殊に生が志を壯とし、棄つるに疎漫の質を以てせずして、頗る其尋常庸俗の見地に異なるに取るあり、奇矯の言説、固に之を己を知らざる者の前に陳す可きに非ざるも、同人諸君は則ち復亦多少の取捨を加ふるを肯せむか、海外留學生の我邦文化に貢獻せるは、一千二百年の古昔より既に顯著なる事蹟なるも、功の存する所亦竟に過を伴ふを免るゝ能はずして、時に或は國本を蝕盡するの危機を醜成するの蓄害を見しことなしとせず、今宇内比隣の如く、萬國交通の密と繁とに於いて、復昔日の比に非ず

と雖も、留學の功過は未だ必ずしも其事の難易に隨うて消長せず、日東帝國最高の教育を受けたる者、友益を世界に求むる、亦必ず夙夜に國家の體面を以て念と爲す所なかるべからず、水城生今や歐西に遊ぶ、其講學の目的は唯識見を長するに存し、而して其方法は則ち觀察を以て第一と爲し、讀書及聽講を添へて以て第二第三に眞かむとす、經由せんと要する所の諸國は、曰はく獨逸、曰はく佛蘭西、其餘以太利、白耳義、英吉利等即ち是れ、若し夫れ露西亞の夏風に嘯き、西班牙の秋月に吟し、更に希臘文明の古趾を訪うて觀光覽古の素願に酬ゆるは、則ち唯資用の許否に任せむのみ、斯の如くにして歐洲各地を遍歴し、歸途を北米に取り、三歳の後、多少の面目を齎して復諸君と故國に相見むこと、是れ區區遊子の願なり、政界に財界に、教界學界に益々雲色の速を加ふる我國現今の社會、在住諸君の責や亦實に三年を短とすべきに非ず、宜く益々自強自

立の志氣を奮勵振作し、俗流の得喪に慌慌たらず、凡庸の議說に徨徨せず、正堂堂確乎として抜く可からざる精神を以て、秩序を具へ、體系を備へ、日進月歩以て異日の大用を期すべきなり、朝に老親に辭し、暮に故人に別れ、雲濤萬里、征客の情、舷頭の皎月時に郷夢を襲うて、天涯所思に堪へざる者なきに非ず、遮莫悽愴たる離情、凍乎たる志氣、復唯丈夫の生涯に足れりこそせむのみ、縷縷の言、以て綖纏の情懷を悉すに足らず、寒暑節物の變移に際し、其れ唯加餐自重せよ。

戊戌八月五日午後三時、半周防灘航行中

佛國郵船エルチストシモン號にて

水城生

己亥歲偶成

ひむがしの日影をくらみ星月の

照るをしたのむよにあへらくも

西航の記

(上)

沼垂停車場を出發致候七月二十三日より數ふれば、今は早二旬有半の日子を悶し候。二十四日東京着、行李匆々の裏、來往頻繁の間に百忙の旬日を送り、やがて八月三日は、舊師先輩學友故舊從遊諸子等數十人に送られて、愈午前六時三十分新橋を出發し、午前九時横濱解纜と相成候。眇々の軀、聊か世運に關する有るの任務を負うて、萬里の雲濤、遠く異域に向うて故國を辭する、一片の丹心、萬疊の波、當日の胸懷、唯知己に向うて談す可き有るのみ、悠々として水上に泛へる巨舶、僅に黒烟と白波と

を名残にて、倏忽の間、既に横濱棧橋を見失申候。船は佛國のメッサジリイ、マタタイム會社の東洋汽船中、鈴々の聞えあるエルチストシモン號、噸數は五七五七、馬力は六〇〇〇、萬疊の波濤を凌ぎて浩渺を坦道と倣す、亦我行に足り申候。始め此行全く同行者を得る能はざるを歎せしが、船中新に得たる者邦人凡そ三名、一名は正金銀行の上海出張店に、一名は其孟買出張店に赴く者、而して餘の一人は工學修業の爲巴里に遊ぶ一青年に有之候。船は佛國郵船の事故、兎角佛語の方通用宜敷、英語は往々不通なる事有之、獨逸語の如きは、國際の關係、といふにもあるまじけれど、殆ど全く不通の有様に相見え候へば、小生は全く英語又は未熟なる佛語に訴へ候。他無之、込入りたる用事は、一行舉りて之を佛語を善くする彼の青年に託申候。

有明の月の光や船窓にさし込むらむとて、衾を蹴て上甲板上に立出

で候へば、船は今熊野浦にやかゝるらむ傾きそめたる海月未だ全く落ちず、舷頭の清影、金波を浩渺に涵して、蒼然たる夜色、得も言はれず、仰いで雲色の速なるを看俯して、汽機の轄々を聞く、海氣衣を濕ほして、久しく甲板に停まるべからず、時辰を案すれば、夜は方に二時を報じ候。想起す去歲仲秋、京洛の客遊、一夕郷友荻洲子と詩を談するの餘、坐ろに漫吟を試みたりしを。

舷頭秋月

國を出で、幾夜か寝つる、かさねる旅の浪枕、こよひ八月の、望月を、想はぬ空に見つるかな、空遠く、水濶し、行へも知らに、
「吾心まよふ。」

「月見るたびに、想ひも出でよ、交互に言葉、つがへてし、人はも今は、何處なる、三千里外、秋の空、月高く、海蒼したつきも知ら

に、吾懐いたむ。

浩々たる海、瓊々たる月、海と月とに、よそへてむ、吾身の行手、
幸おほき、未來の夢を、いのちにて、任重く、道遠し。いざや進ま
む、吾意いさむ。

詞や固より咄嗟吐き來たる竹頭木屑、看るに足る者なしと雖も、期月な
らずして前言識を成し、今や當日の感懷を事實にするに至れる、亦一奇
といふへく候、但し今宵の月、未だ純然仲秋海月の趣を成すに足らず、來
月再び満月を看るの時は、身は既に地中海上古希臘神話界中の境地に
在りて、眞個惡詩の實現となり得る事に可有之候。

四日午前十一時神戸着、上陸し、瀛車して故人を須磨保養院に訪ひ、其
健康を祝して別を告ぐ、想ひ起す此地此莊、是れ一昨年夏、山博士と曾
遊の境、松聲濤聲依々として吾を迎へ、爽颯として吾を送るに似たり、昔

日、山陽の一狂徒、賴久太郎が十八歳の壯齡を以て、風雲の雄志を懷き、到
る處の山光海色賦するに、史詩の生命を以てせる、初期遠遊の當年より、
今や正に、一百年、一の谷の舊趾、幾旬の風光、今日更に遊子の感慨を惹き
得候、夜九時此を辞して神戸に歸り、十二時歸船、朧月夜の甲板上、遠山を
呼び近山を含む激漣の嘯きに耳を洗うて同行の侶と家山の情を相語
る。午前二時長崎に向うて解纜す、一睡夢は旭光に破れて、明くれば八月
五日、航程瀬戸内海に入る、此日天氣晴朗、海波起らず、一島送り一島迎へ、
殆ど應接に遑あらず、風光の明媚は實に名狀の外に在り、午後三時、僅に
浩渺の大海に出づ、是ぞ即ち周防灘にて、山陽南海、西海三道に包擁せら
れたる、三角形の小なる空所と、小學校の地圖の上に記憶致居りしに、來
て見れば聞きしに増して尙更に浩大の感を與ふる者は實に海洋の眺
望にて、此周防灘の如きも亦其一例に洩れざるべく、南豫西豊の山脈、一

時は全く觀望の外、水平線下に没し去り候。仍りて思ふに、大陸に大陸相應の偉觀あるが如く、島國には亦島國特有の大觀なきにあらす、而して所謂島國特有の大觀は、陸に於いて求むること難くして、實に之を海陸參差の際に求むべき者、是を之れ察せずして、漫に島國根性を云々し、狹隘固陋を斥くるに毎に島國云々を以てする、輕薄なる自屈者流、近時東京邊の雜誌杯に散見致候模様あるは、近頃心得違の至と、此海山の島國的大觀に對して坐ろに一、笑を催申候。

休なき瀛關は遠慮なく此大觀を後にして、黄昏る頃には馬關海峡へと差掛り申候。賴翁の壇浦行に所謂、畿甸之山如龍尾、蜿蜒曳海千餘里、直到長門、伏復起、隔海豐山呼欲鷹、帆檣林立北岸市、なる者、實に此地の形勢に有之、但し二十年來門司の殷富の爲に、最後の單句のみは北岸を兩岸と修正するの要有之候。海門の急潮晚に際して更に其勢を増し、外海内

海水相激し、長山豐山峰相迫り、兩岸の夜景、洵に一種壯絶凄絶の感を與申候。山日落海如墨、何物遮船夜啾啾、文明の利器に對して今更閉口致す程の冤鬼にも之なかる可きも、今は唯山海の偉觀にのみ心を惹かれて低回懷想に詩思を耽らす遑も御座なく、而して船は早くも玄海洋上に浮ひ申候。六日朝目覺むれば、船は既に長崎に着し居り候。二分是海、二分山、夾海山爲碧、玦灣、蟹館、官樓、家萬戶、高低山色、海光開。八十年前詩人の筆今に於いて猶寫眞の活詩たるを失はず、同行の二人と丸山鹿島屋に小酌し、日本料理に暫時の別を告申候。

此日午後三時半、暴風の警報を擁して船は上海に向うて解纜す。是よりは愈我祖國を離れて異邦に入り候事なれば、茲に暫く船中の生活を記載可仕候。所謂文明開化の先達を以て自ら任する佛國郵船の事なれば、萬事整頓を期せるは論なき事ながら、實地に當りて中々に其備れる

を認め得申候。客室は日常生活一切の物を備へ、食堂あり、浴室あり、奏樂堂あり、圖書室あり、喫煙室あり、食時は主なる者二食、其他三度都合一日五回と定まる。先づ朝六時、茶、珈琲、シヨコラ、乳汁、麵包等を供するを第一回とす。第二回は即デジウチにして、午前十時を以て正式の食卓に就く者。第三回はランチと稱へ、午後一時を以てスウプ、冷肉、葡萄酒、麵包を供し、第四回はデチエにして、午後六時半を以て正式の食卓に就き、最後に午後九時を以てするスウベエあり、是には茶、珈琲、菓子を供し、以て一日の食卓を了ふ。就中正式の食卓には獻立の目錄あり、酒は通例白赤兩種の葡萄酒並に麥酒、ブランデー等を供し、食品は必ず十種以上を饗す、食時中パンカアと稱する大團扇を搖かして以て涼を送る。第一回及第五回は便服を以てするを妨げざれど、其他は必ず衣襟を正しうするを要す。其他船客の需に應じて供給する食料の品類、亦頗る多し、浴室は大理石

を以て湯槽及側壁を作り、二管ありて隨意に冷水及熱湯を送り、適宜に混和して以て入浴に便す、浴了れば直に槽底の鐵栓を抜きて陳水を棄つ、頗る清淨の至に候。船中の給仕はすべて倔強の壯漢なるが、之を呼びてガルソン(童子)と謂ふ、此偉大なる番子に金を與ふる時、人目にかゝる様の場合には、ノオ(否)、ノオ(否)と申し、少しく恥づる色あるも、實は喜びて受取、其効能は極めて的面に候。實にや、地獄の沙汰すら金次第なるの今日、地獄とは僅に鐵板一枚の隣國なる此船中にて、此事ある、寧ろ當然と申す可く、唯流石に文明國人相手の事なれば、内密にする、と屢々する、との二ヶ條が秘訣に候。但し支那人は公然の授受を妨げず、されば所謂文明と半開との差は、唯公然と内密とに在りて存する儀と發明すべく候。船長以下、大抵退職海軍士官を任用せる事とて、皆々中々禮儀を知れるも、唯佛人の常習、容易に自國以外の國語を使用せぬ癖は、往々他國人な

る船客を困らせ候。船中火夫にはアラビア人、水夫には雜種人、雜役には支那人を使役致し候。

横濱よりの同船者に二人の女子あり、一人は澳國人の子にしてアンニイと呼び、僅に十一歳の少女を以て、上海まで獨行致候。横濱解纜の際は泣居りしも、二時間の後、卒然小生に向うて時刻を問ひ掛け、これより同行の邦人皆懇意に相成り、爾來氣先よく上海まで參候。若年の少女、千里の單航、實に邦俗想像の外に候。今一人はアスと申して、柴棍の住人と思しく、母なる老婦と共に同地まで參候。此者中々のピアニストにて、玄海洋上五日の夜の如きは、輕攏漫撚珠玉を轉して、或は洋々或は嚙曉、船客をして暫く身の浩濤の上に在るを忘れしめ候。アス年二十左右、風姿亦多少の妍を添たる様相見え候處、次第に得意相募り、西俗剽輕の地金を露し來り候ま、今朝柴棍上陸の時には、皆々厄介拂の心地致し候。香

港より天主教の尼二人乗り込み、終日垂籠てのみ居り候故、船暈甚だしく、殆ど毎に食卓に連らず、されど耶蘇新教が、一盛一衰、消長常ならざる間に、天主教の平坦なる行路を進み得つるは、一は此船暈の裏より胚胎せる結果にもやと存候。

長崎にて得たる警報は、やがて事實として現れ來り、甲板上水夫の奔走忙しく、晚餐の食卓には綱を張る程なりしも、船体の動搖位にて事濟み、八月八日の午前七時、上海に近き吳淞に投錨致し候。此處にて同社の郵船メルボルン號に乗換へ候間に、會社の小汽船に乗後れ、一旦上海行の機を失ひ候。上海は吳淞より楊子江の支流を遡ること約七里の上流に在り、此間小汽船の來往あり、會社の便船を失へる一行は、直に支那人の小舟サンパンを僦うて風浪を凌ぎ、吳淞に上陸致し候。人氣の卑陋、市街の醜穢、實に聞きしよりも數等の下に在り、再び小舟を僦うて上海往

來の小汽船に便乗し、正午を以て上海に着し、直に邦人の旅館東和洋行に投し候、洋行と謂ふは猶會社又は商會と謂ふが如し、晚景に至るまで市街を散歩す、六十萬の人口を有する東洋隨一の大都會、東西各國の領事館悉く具足せるは、東洋諸國唯此地あるのみ、黃浦及其支流に於ける船舶の輻輳は、中々隅田川及日本橋の比に非ず、東和洋行に沿へる溝渠の如きは、全く大小の船舶を以て蔽はれ居り候、日本領事官に同窓の友法學士諸井あり、晚景より來訪、共に街衢を散策し、領事館に至りて快談す、館は米租界に在り、租界は英米佛の三あるのみ、日本は米に居候の身分に有之候、此地の形勢上述の如きを以て、眞個列國の競争場たる面目を具へ、實地の局に當りては或は憤慨に堪へざる事、或は發明する事等多々有之候よし、何分にも西人は二十年三十年を長しとせずして、或は布教の事に従ひ、或は商事を營み、充分支那の事情に通曉し、其餘有る知

識を以て百事に當るが故に、行止機敏、處措妥當、以て其事を濟す、實に偶然に非ず、邦人の爲す所は全く之に反し、碌々事情の通曉を力むるの根氣も無く、不充分極まる知識を以て、輕忽なる議論を立て、事務を斷ずる、其失敗多きは當然なるべし、思ふに國家が甚だ人材に拂底なるが爲に有爲の士の此方面に向ふ者少きこと、其一原因なるべきも、當面の方策としては、繼續事業として支那研究の事に従ふ方法を立つること尤急要ならむか、例へば諸井二年にして上海を去り、何某之に繼ぎ、亦二年にして去るあらば、觀察研究皆同一事項を繰返し、百年の後と雖も、日本社會が受くる知識は常に其端緒と皮相とに止まるべし、蓋し邦人が恒に有する短所は、實に協同及繼續事業の舉がり難きに存す、此短を補ふは確實なる會同を起すに如かず、東邦協會の如き、今日萎靡偷安の態に安んずるは洵に恥づ可き也、世界の政治及通商問題に留心する者は、今日

東洋研究の方策如何の問題より手に着くべしとせむか是等の雑話を交換し夜三更を過ぎて相別れ候諸井及藤田劍峯等公務の餘暇日本語學校を建て支那人に教へ居り候劍峯は文學士此地に新聞記者たり當時歸國中にて相逢はず候。

九日再び領事館及正金銀行支店を訪ひ十二時會社の小汽船にて歸船す午後二時解纜の筈に候處支那近海に名高き大風の季節とて又もや風浪の嶮惡の爲十五時間の遷延を爲し十日午前五時始めて拔錨の運びに至り候但し大風の厭ふべきは航行の不安のみには之なく我國の米作に向うて最後の大難關たる二百十日乃至二百二十日の暴風は即ち此支那海より起る低氣壓の進行たるに外ならず而して此行や恰も此大切な季節に際し候事故吾々農國民胸裡の苦惱は尋常船客に比して一種別異の者に有之候幸にして九日の大風も約一晝夜にして

收まり十一日以後は格別の事なく十二日夜十時を以て香港に着し候。香港の形勢は長崎に彷彿たり唯長崎の半島たるに比して香港の長十哩巾五哩の小島たるを異とするのみ十三日朝上陸市街を巡覽し、トラムエエにて山上に登臨す山は殆ど四分一乃至三分一の急勾配にて、鐵路網索を以て引揚ぐる仕掛なり此地の名物は濃霧と驟雨とにて、一行亦山上にて之を経験致候香港の政治上通商上の價值は今縷言を要せざるも英人にして更に一段の奮勵を加ふるに非ずんば東洋の商權或は多少の移動を見むとの説を爲す者も有之候。

上海にての話に聞きたる佛國の天主教宣教師と偶然香港まで同船致候これは支那に於いて二十年以上布教と支那研究とに従事せる人にて漢字を學ぶに最初は定木を用ゐて字書を稽古致し候由辨髮支那服にて如何にも堅忍の面相ある男に有之候小生との談話中頻に煩瑣

哲學を讚稱し、近時にてはストラウスを推重して、頻に之を研究せりやと相尋ね候、彼等の迂濶にして固陋なる、煩瑣哲學ならでは哲學にあらずと考へ、其本國の最大名物たるオオギュストコムトの實理哲學及社會學などは、欠呻にも出し申さず、社會學といへば社會問題の事なりと吞込む先生達に有之候、さりながら兎も角今日まで船中にて學問上の事項を談せるは此者一人に有之、之に附けても歐西學界の消息を宣教師連より窺ひ知らむとするの甚だ危険なるは知らるべく候、青年好學の諸君子は、随分御用心可然歟、則ち識見に於いては迂濶固陋なりと雖も、堅忍不撓なる事業家としての、彼等の價值は、實に確認を要する儀に、有之候。

正午解纜の豫定故、歸船仕候處、又々大風の爲に見合せと相成、夜一時に及びて始めて拔錨致し候、此日八月十四日天候最も兪惡、船体の動搖

罕に見る所と船員も物語り候、尤も上海にて乗り換へたる後の此メルボルン號は、噸數も四〇八〇、馬力も三四〇〇に過ぎず、最小船を以て最難處を過り候事故、今回の航程の難關は支那海を極點と致すべく候、二十五日コロンボよりは、濠州歸航のポリチシアン號に乗換ふる筈、同號は六五〇六噸、七二〇〇馬力、而して印度洋のモンヌウンは既に其季を過し候へば、最早安穩なる航海と相成可申候、幸に此度も大風長く續かず、十五日には風浪名殘なく收まり、十六日の夜半を以て湄江の一河口に差掛り、是より水先案内あり、河を溯ること約三時にして柴棍に着申候。

此河の幅は約三町に過ぎず、柴棍市街の邊にて僅に百間に満たず、而して五六千噸の大舶を容易に横着けにするは、之を我新瀉に比して、實に驚く可く又羨む可き次第に有之候、是迄經過せる諸港中、横濱、神戸、長

崎、香港は海港にして、上海及柴棍は即ち河港に候、吳淞より上海に至る、黃浦兩岸蘆荻の生ひ茂れる長堤一帶の光景は、全く信川の所觀に異ならず、河幅亦白山浦に於ける信川に匹似す、柴棍附近河畔の景致、揚柳の河岸に點綴せる、猶粟の木川の如し、河港の成功斯の如きものあるを見れば、兎に角新潟港や亦猶研究問題を殘遺せる者と謂ふべく、横濱以下の三港の規模には所詮企及すべからずとするも、天然の形勢上、時運の必要上、及人工の程度上、出來得る限りの規模を悉して精到周密なる設計と方針とを立つること、固に急要の務なるべく、若し必要ありて而も土着人士の之に應ずることなくんば、他方の人や必ず政府の名に於いて之に手を下すを躊躇せざるべし、吾輩が北越人士殊に新潟市の青年諸君子に訴ふる所に候。

柴棍は東洋に於ける佛國の根據的殖民地交趾支那の首府にして、市

街の整頓は目を驚かし候、熱帶地方の事とて、樽檜等の並木能く繁茂し、加之道路の設備完全にして、街衢は洵に爽快清潔に有之候、日本諸港より上海、香港、柴棍と進み参り候程に、市街の道路は愈益清潔と整頓とを加へ、一昨年頃、大日本とか申すエラキ雑誌の第一號の社説に、帝都修飾論と題する卓論を承りし様覺は候が、洋行歸り記者の心裡も、今日充分に了解致し候、東洋諸港到る處に跋扈する日本人は例の醜業婦にて、殊に肥前島原邊の者多數を占め候由、大抵最初は横濱神戸へ奉公に行く積りにて人拐ひに欺かれ、意外にも千里の絶域に誘ひ來られて、遂に墮落するの順序にて、大抵一ヶ月六十圓の收穫あり、其一半を抱え主に供し、餘の一半を以て衣食致し候事故、洋客に身受せらるゝの外は、生涯浮ふ瀬なき運命なりと人の語るを聞き申候、彼等唯一の慰めは、本國に居りし時よりも美服を纏ふの一事のみ、亦惘然なる境界と申す可き歟。

柴棍の士俗男は月代を致し候、近頃は總髪も段々殖る様子、一般に言語に顎音鼻音多く、誠に微弱の氣格を表し候。同船に印度人も數人有之、彼等は概して眼瞼暗黒にして、何となく憂鬱の相貌を呈し候。支那人は唯利を是れ見て修養の何たるを解せず、其勤勉なるは唯自我一己の物欲を充たさむとするに過ぎず、但し其國民的性格なきも而も社會的性格に富むは、未だ容易に侮る可からざる者、彼等の一致團結の鞏固なるは、到る處に取沙汰致し候。其他東洋に國する民衆、概して皆疎懶無氣力、洵に情無き状態に有之候。東洋の振興など、今更事々敷並べ立つるの要なきも、將來世界の文明に對する日本國民の天職の至重なるは、一たび境を出で、益其然るを感し候。

支那も南方香港邊にては、草木の繁茂全く我國と其觀を異にし、宛然楚辭中の植物園に入る心地致し候。柴棍に至りては、主なる産物は米な

れども、平野彌望、亭々たる椰子樹の獨り遠近に點綴する光景、愈々熱帶地方の風色と相成候。國を距ること日に遠くして、時辰愈々速に、夜々北辰の低く下るを望見す、天涯の離居、月を看て、懷望の情を寄すること、古來和漢に其例少からず、斜月沈々、藏海霧、碣石瀟湘、無限路、か、長安一片、月、萬戶、擣衣聲、秋風吹不盡、總是玉關情、何日平胡虜、良人罷遠征、か、忘れじ、な、難波の秋の夜半の空、異浦にすむ月は見るとも、か、或は又、秋の夜の月、毛の駒よ、わが戀ふる雲井を、かけ、れ、時の間も見むと、か、申す、事は、是れ、皆、南北の遠別には、用ゐるべきも、經度の差ある、東西萬里の別離に、は、伯林の居待の月が、新潟の有明の月といふ、工合故、甚だ似つかはし、か、らぬ、事に候、國を辭するの、前一友との夜座に際して、寧ろ、北辰こそ古詩人の月に、代用すべきかなど、相語り候處、今や、それも亦、北緯の差のため、に、其位置を變するを認むるに、立至り、始めて、王勃が、滕王閣序に、地勢極

而南溟深天柱高而北辰遠と道破し居れるに心付き申候殊域の風光觀
 る人の心任せにて或は鎖魂の縁とあり或は啓發の因となる南海航中
 一夕の感興聊か記して郷國辱知の前に陳するのみ馬耳塞着は九月九
 日翌日巴里泊九月十一日を以て伯林着の豫定に有之候頓首

戊戌八月十七日夜柴棍船泊中

水城生

(下)

謹啓其後は御無沙汰仕候遠航海陸無事留學地に到着攻學の事亦其
 緒に就き候まゝ茲に前信を承ぎて道中の見聞感興の一端を申上候扱
 も八月十八日午前五時を以て佛國郵船メルボウルン號は其國東洋第
 一の殖民根據地なる柴棍を解纜し暹羅灣内風浪殊に靜穩にして航海
 二晝夜宵々北辰の愈々降下するを望み八月二十日午前八時を以て新

嘉坡に入り申候柴棍の佛國に於けるが如く新嘉坡の英國に於ける頗
 る相互に對抗の態度を取る模様候柴棍の動物園新嘉坡の動物園及
 博物館共に其道の學者の參考に足る者若し夫れ政略上及商略上の意
 味に於いては新嘉坡は馬刺加海峽を扼し柴棍香港線の他コロムボ線
 ラングウン線カルカッタ線是れ皆ベンガル灣内の航路にして自國の
 版圖内を通ずる者其外に蘭領サマラング及瓜哇線あり以て東印度諸
 島の中樞を衝く地勢の樞要は到底柴棍の企て及ふ所にあらず近時我
 國亦領事館の設あり商館は三井郵船會社の外較々大なる者は大坂の
 乙宗商會に有之其樓上に我商品陳列所の設有之候馬車を備うて半日
 街衢重要な地を巡覽し二時歸船午後三時船はコロムボに向うて拔錨
 致し候

新嘉坡は北緯一度に在り是を今回航海の極南と爲しこれよりはべ

ンガル灣内正西の方位を取り、航行五日、八月二十五日午後三時を以て印度錫蘭島の要港コロムボに達す。北斗の移動既に其極に達して、時間の差違乃ち日々大を加ふ、陰曆仲秋の新月、頃日漸く盈ち始めて、海頭清夜の情、宵々遠客の懷抱を動かじ候。將に馬刺加海峽を出でむとするや、蘇門答臘大島の北角を過る、火山脈の山勢透迤、酷たわが北越の米山を髣髴す。ベンガル灣内風なしと雖も、名にし負ふ印度洋の浩濤、宛として大陸の曠原の如く、十頃一波、百頃一浪、更に大海を渡るの雄心を惹き申候。新嘉坡と同じく、コロムボは亦海頭の港灣ながら、風位と山勢と、彼に於けるが如く、安全なる碇繫の地を供せず、是に於いて人工を以て大港を築成せるの實例は、コロムボ實に之を供し候。築成の突堤、長さ約一哩、高さ水面に於いて約二十尺、而して其外を襲ふの大濤は突如として之を撃ち、餘勢の激する所この高墻を超へ、飛瀑を成して堤内に落ち來る

にも拘らず、堤内の水面は大鏡の如く、枯葉の如き小舟も安全に來往致し候。此處にて別れ残れる銀行員亦別途に向ひ、巴里行の青年と日本人は唯二名となり、濠洲航路より歸來のポリチジャン號に乗換へ、上陸觀光の暇なく、午後八時を以て發船致し候。これよりして後は、英領亞丁にも、佛人が近頃得たる亞弗利加のヂブウチにも寄港せず、亞刺比亞海を航すること五日、日に浩海の淼漫を望み、三十日午後ソコトラ島の岬角を過き、始めて曉嶠嶮たる熱帶日下の亞弗利加山脈を望み、三十一日夜三更、バベルマンデブ海峽を過りて、乃ち紅海に入る。夜望山色蒼然、復昨見る所の如くならず、九月一日海頭の晴色拭ふが如く、水面油に似たり。夜に入りて月色皎々、遠望山を見ず、唯巨舶の波を切りて、濛々の聲を作すを聴くのみ、蓋し陰曆仲秋十五夜也。

曩にメルボクルン號に在りしや、客に佛國海軍の一主計官あり、自ら

稱して酷だ日本の風物を受すと謂ひ、日本の語學及文學の稽古なりとて、裸美人と題する小説を携へ候、即ち美妙齋の蝴蝶、春の屋の細君、嵯峨の屋の初戀、及忍月の因果四篇を収録せる者、編次の順序に隨ひ、彼が請ふまゝに蝴蝶を講し聞かせ候處、何が扱學臭紛々たる青年の作とて、彼主計官は大に學習の困難に閉口の態に候まゝ、やがて初戀を以て之に代へ申候、嵯峨の屋も時には極端に墮落せるも、此作の如きは、理想の純潔、行文の無垢、先づ以て明治小説の一傑作と目すべく、春の屋の細君亦得難きの作ながら、外人に講義するには少々如何敷節あり、忍月の因果に至りては浮氣書生の一場話、取るに足らざれば、先づ初戀を以て教科書に充てたる次第に候、然るも猶彼の主計官は、其篤學にも拘らず、頗る困難の態にて、時々、私、日本は遠からず、漢字をやめやうと思ひます、假字計りにならうと思ひます、の評言を繰り返し候、されどこれは中々輕忽

の問題にあらず、日本語學の困難を來す第一の原因は、文法の整理の未だ付き居らざるに在り、文法整理の上ならでは、文字の改良は無詮の論也、從來起りて且仆れたる假名の會、羅馬字會の如き、皆此過を冒せる者、近頃復々囂しき新國字論の如きも、亦是れ本末の順序を辨へぬ迂論と兼々存居候旨、彼主計官及同船の邦人等と語り候、文部省も近頃國語取調委員を設けて、新進の學士三名を挙げ、何か目論見居り候へ共、方針上深く省る所なくんば、亦復無功に了るべく、國語完全の問題は、吾々、字内の思想界に生活する者に取りては、勿論國家の自立及膨脹の爲に、一日も忽視す可からざる重大の問題なるに、從來學者は空論を争ひ、文部は這般百年の大計に頓着せず、洵に遺憾の至に候まゝ、此日九月一日午後、竟に語學者の急務一篇を草して、帝國文學に寄せ、一は以て、學者を刺戟し、一は以て、文政の當局を諷し候、

九月二日の夜は十六夜也、航海既に入日、土を踏まざること新嘉坡以來既に殆ど二週日、軀躰倦みて力なし、乃ち月下に航友と居合の形を講す、大喝數聲、海若悉く僞伏す、また海上の一快事、三日、隨感隨錄、驚濤飛沫十數篇を拾掇して、在東京の郷友同人に寄す、而して十日の航海亦漸く了り、明くれば九月四日、曉風爽涼、船行漸く緩みて、午前七時十分蘇士に投錨す、蘇士や北緯既に三十度、我鹿島の南沖繩の北に該る、時維れ、九月今朝秋風の衣袂に滿つるを、知り申候、灣頭東を望めば、亞刺比亞の連峯、蜿蜒逶迤たり、西は即ち古埃及の群巒海を抜いて聳立し、其間一望空濶、平野遠く彌り、唯蘇士港街の瓦色遙に漣漪に映する、あるのみ、蘇士運河實に其間に通ず、噫此維れ、歐西最古歴史の地、舊國の雲色低迷として遊子千秋の情を惹く、浪平に、風冷に、土人船に來りて、葡萄を鬻ぐ、午前八時半發船運河に入る、運河中水面に於いて二百尺、水底に於いて七十五尺

深さ二十七尺、長さ三十四里、其間イスマイル市附近及數所に在來の池沼によりて堀鑿せる所あり、工事の大なるは始皇の長城煬帝の運河に及はずと雖も、其人間に大功あるは則ち遠く之に軼ぐ、佛蘭西はレセツプの名に於いて永く其名譽を享くと雖も、資本繼がず、經營宜からず、今は英人の掌裏に歸せり、兩岸唯沙土の堆きを見る、日中の暑熱言ふべからず、彌望極目、砂原大濤の如く、處々灌木の叢々點綴するあり、悠々として駱駝、其間を徜徉す、正に是れ舊約書中の光景也、

運河航程十四時半、此夜十一時を以て地中海の一港ポルトサイドに着す、風物既に小歐羅巴とも申す可く、風俗の墮廢、人氣の險惡、新開地寄合地の常として言語同斷に候、賈人街上の行客を拉し得て、一たび店前の闕を踏ましむれば、左牽右引、必ず賣付けを成して、而して後已む、若し夫れ較し陰暗なる狹斜の巷に入らむか、突梯滑稽脂の如く、韋の如きの

倭漢那邊よりか現れ來り、袖を牽き杖を引き、いふ、若く美しき佛國の佳人あり、鴛衾鸞帳、吉士の來り誘ふを待つこと久しと、此の如きの類枚舉に違あらず、歐人の諺に、ポルトサイドにては十人中十二人まで泥棒なりといふ、允なるべく、諸事以て類推すべし、唯茲に「佛國」の二字は頗る注意すべき儀に可有之候。

九月五日午前三時拔錨、地中海亦多少の風浪あり、六日午前遙にクレエト島の南邊を望み、七日伊太利の南岸を望み、風光畫の如きメツシナ海峽を、行き過ぐ、郊樹、市街、紅薔、碧瓦、點々指し、數ふべし、山は多く、赭にして樹木を生せず、村郊處々の青蔥は、蓋し園藝の苦辛を以て成れる者、海峽の緯度恰も我郷國の新潟に該る、天高く、氣清く、碧深うして、秋色足る、家山の風物を憶ひ得申候、八日サルヂニア及コルシカの間を過ぐ、此間過ぐる所南歐の山相、總て是れ磊砢たる疊嶂のみ、眞木立つといふ枕詞

は獨り日本の山にのみ冠らすべきを悟り候。

永き航海も無事相果て、愈明朝着船の事に候へば、八日の夜は船客皆浮き立ちて喜び合候、是等多くは佛人にして、皆待ちに待ちたる故國に歸着の事なれば、此夕晚餐後は舞踏會を催し、果は隠し藝の共進會となり、萬里征人今夜の情は、其處除けにして、打興じ候、明くれば九月九日、昧爽起きて甲板に上れば、既に三五人の先登あり、例の磊砢たる疊嶂ながら、朝霧を衣裳として、は稍愛すべく、舟程其間を縫うて、午前六時吾々の大舶は、竟に佛蘭西國馬耳塞の港に入り申候。

七時上陸、税關も滞なく通過し、馬車を驅りて旅店羅馬館に投し、半日の巡覽、茲に始めて歐洲大陸の土を踏み候、馬耳塞は巴里に勝るときさへ同地の人は、誇る由なれども、街衢の光景、一通り歐洲都會の面目を具へたるまでにて、格別品格なき地に有之、人氣は頗る荒き様相見え候、市中

を見物して尤も目に着き候は、絡繹として婦人が多き事、其八分通りは左袂を取れる事、老婦の醜き事、其八分通りは鉛華焼けの致し居る事、馬の大なる事、殖民地兵の服装の異様なる事に有之候。午後四時汽車發す、凡そ歐州の汽車に三種あり、一を急行と謂ひ、殆ど途寄りせず、概ね一等客車のみを以てす、二を特別といひ、往々三等を省く、途寄甚だ少し、三を乗合と謂ひ、各驛大小共必ず停車する者是なり、今乗れる者即ち特別に候。車窓の願望、極目荒野の渺漠たるを看るのみ、風物蕭條、毫も掬すべく愛すべきの趣なし、目に遮るの樹木は殆ど唯、箒の形せる白楊のみ、洵に浦淋しき感を興ふる品物に有之候。牧場の割合に耕作甚だ開けず、歐西の開化、多く是れ人力を以て天然に克つより來れること、これにも感知せられ候。夜半里昂を過る、上弦の月色凄凉として車窓に入る、凡そ佛國の南部古來美姬を以て鳴る、未だ其の果して然りや否やを詳にせず、而

も常盤木の少きは事實として確め申候。北部に至るに隨ひ少しく其生長を見、野面の景色も幾分か立直り候へ共、松柏の翠色、到底我邦見る所の如くなる能はず、斯かる處にては、詩篇の題目も、天然よりも寧ろ人間に傾くは當然と存候。

十日午前十一時四十五分、巴里着、汽車の都合により半日の間を得、同行の青年を其校コレエヂ、スタニスラスに誘ひ、共に日本公使館に同窓の學友にして外交官たる法學士田村を訪ひ、取敢へず那波崙第一世が戦勝の紀念たる凱旋門に登臨致候。門は巴里の一中心を成し、一目の下全都を瞰望すべし、建築はラテン民族固有の趣味を見はし、殊に其前壁に於けるバスレリイフの彫刻に於いて然るを見申候。英雄の民族に於けるは、星宿の天穹に於けるが如し、生涯の得失の外に、永く民族の誇稱として不朽なる者可有之候。巴里の市街は馬耳塞に比して優ること萬

々ながら、割合に古き市府だけに、割合に長短の尤雜を免れず、凡そ市街の整然たる規模は、歐陸にては先づ伯林を推し候事と承り申候。此地は何れ明後年の再遊を期し、四旬同航の邦友に別れ、同日夜八時五分の流車にて、白耳義國の域内に差掛り、ヘルヴェスタアルにて獨逸國に入り、税關を經、九月十一日夜十時二十二分、滯なく最初の留學地當伯林府フリイドリヒ街停車場に到着仕候。

佛蘭西より東し、獨逸の疆域に入るに及びて、野望全く趣を改む、遠望丘阜の起伏なく、曠濶の平野多くして、畑善く開け、森林蒼鬱として、其間に參差し、兎も角、野面の景色は頗る人目を悦はし候。樹木は松に乏しからず、其他主に菩提樹、榆、檜之に次ぎて白楊、楊柳等の雜木に有之候。歐州各地停車場に非常の等差あるは尤も吾々を驚かし候、其狹小なるは巡查の交番所の如きありて、中々龜田停車場の比にあらず、其中なるもの

にて日鐵大宮停車場に比すべく、少しく名ある都會のは、殆ど全部を玻璃屋根にて蔽へる巍峩たる巨屋に有之候。複線と廣軌とは勿論の事、速きは右の特別にて平均佛國十二里獨逸十四里許に有之候。

佛國にては、馬耳塞にても巴里にても、同行の青年を迎へたる宗、教、學校員の案内に均霑して、案外の好都合を得たりしが、獨逸に入りては全く不知案内の新天地に單獨旅行の身と相成り候。かくて伯林到着の夜はフリイドリヒ街の英吉利館に投し、其翌十二日早朝馬車を驅りて明き間貸す家を探し、不取敢當分の僑居を定め、日本公使館に至り公使に面し、攻學上萬端の準備に一日を消し候。伯林大學は來る十月末まで秋休中にて、入籍の手續を成すを得ず、且是は小生の爲には必ずしも極めて重要なるに非ず、入籍の上は兎も角、宿名あるワグネル教授の經濟學は聽講の積りなれど、更に重要なるは圖書館の利用に有之候。これに

は圖書借出と閲覧室讀書との二法あり、閲覧室は何人と雖も無料入室を得れども、圖書借出は大學若くは獨逸帝國に縁故ある者に非ざれば能はず、小生はドクトル千賀と申す仁の好意に頼りて此十五日に圖書借出の手續を了し、今十七日より閲覧室の讀書を相始め、斯くて攻學の事亦既に其緒に就き申候、圖書館は大學の附屬にも一箇所あるも、右に記せるは王國立圖書館と稱して、獨逸帝國肇業の英主前々老帝が、毎日窓を開いて忠愛なる柏林市民の群集より龍顏を拜まれたまへるを以て有名なる、維廉皇帝宮殿の裏に在る大建築にして、一百餘萬卷の藏書あり、閲覧室の縦覽書類のみにても亦二十萬卷に上る、歐洲第三の學術的大圖書館に有之候、既にこの朋友を得たり、天涯の遊子復離群寂寞を感せざるべく候。

柏林名所の中、必要なるだけは覺え申候、右の宮殿、圖書館、大學、ウンテ

ルデンリンデン街、ブランデンブルグ門、ジイグスヅエレ戰捷塔、チエルガルテン公園、帝國議會事堂等、一々記載と感興と啓發とに資する者、晩に乗して、這般獨逸帝國の覇圖に於ける因となり縁となれる紀念物、の下に散策すれば、絶東帝國の一臣子、愴然、惘然、瞿然、饗然、萬感の蜩集に堪へざる者有之候、若し夫れ比日歐陸新聞紙上に騷然たるは、露帝の徹兵提議詔勅、ドレイフス事件、埃國皇后弒逆事件に有之、就中前二件に就いては、佛國は頗る亂調子の様子に相見ぬ候、抑、人の特質が最も善く婦人關係によりて流露する如く、民族社會の特質も亦然り、殊に獨逸國や柏林市や、今は血氣盛なる壯年時代に在り、此地に於ける風俗上の件も、頗る既に材料を得たり、其腐敗や殆ど巴里の壘を磨するに足るやに見受け申候。

頭を回らせば此行内陸百二十里、海上四千〇五十里、歐陸五百里、四十

二日の過ぐる所凡四千六百七十里地球の大圓の約半分は該當し、中々古來支那の詩人連が遠別離など申して吟詠せる比類には無之候、伯林は緯威東經十二度、北緯五十二度三十分なれば、新潟との直徑距離は二千五百里に有之、土地は千島の極北占守島よりも尙少しく北に該れども、北海の暖潮の爲に、左程迄には凌ぎ難き事之なかるべく候、時計は東經十五度の中歐標準時を用ゐ候へば、東經百三十五度の我標準時とは正に八時を差へ候、處變れば品變る、變らぬ者は斯理在焉、自今而後が微驗に候、着來未だ郷國の新紙に接せず、北越今年の秋况竟如何、先は右迄申上候、時下折角御清康を祈り候、不一。

九月十七日於伯林非立布街客會

水城生

郷友に寄す

東京行きの東京自慢を爲し、洋行歸りの西洋自慢を致候程片腹痛きは無之、畢竟空腹の折に酪酊し易きと同様、是等は本來胸中無一物の致す所と存候、讀書學問は何の爲に致候にか、申す迄もなく、以て格物致知の功を成し、以て開物成務の道を求むる所以に外ならざるべく、平生少しく活眼を開いて歐西の書籍を閱讀致居り候者は、一旦足歐西の地を踏みて親しく其文物を察し候とて、中々容易に新知識など得らるゝ筈の者には無之候、去年伊藤博文氏が四月末に出發して十月初に歸朝し、僅々三ヶ月許歐洲に漫遊し來りて、早くも十月十七日龍門社の會合に有名なる新知識演説を試みられたるや、當時吾輩は唯驚嘆を以て之を

迎ふるの外、出づる所を知らざりし次第に候。總じて洋行歸りの弊に三種あり、歐州各國が競うて其國粹を保存し發揮するの實勢に接して、茲に始めて國粹保存が立國の要諦として已む可らざる所以を認め得る者、之を洋行歸りの上等と爲す。此類は就中獨逸洋行歸りに多きに似たり。是れ其國情頗る國粹に熱中し、且其狀の容易に看取すべきが爲なるべし。歐州の文物に接して其外觀の美なるに驚き、其躰系秩序の整然たるに眩して、其事物は悉く以て我の摸範とするに足る者と爲し、無差別に之に師事せむと擬する者、之を洋行歸りの中等と爲す。多くの洋行歸りは之に屬す。而して洋行歸りの下等なる者は、即ち物質的文明の發達に辟易して、直に第十九世紀の理想を以て這般の物質的文明に在りと爲し、亦以て古今萬國文明の極致と爲し、之を致せば社會經營の事乃ち成ると思惟する者是なり。是れ皆内に確乎たる識見なく、既に自ら視

る能はず亦他を知る能はざる賤丈夫の爲す所にして、識者の憫む所、悲いかな我社會亦薰猶の辨を成すに迫あらずして、多少洋行歸りを遇するに先覺者を以てし、這般の陋見其弊を天下に流す者あるに至れる次第に候。洋行歸りの價值を兎も角批評的に判定せるは、學堂尾崎氏が保安條例の爲に愕堂となりての洋行より歸朝せる時に始まり申候。識見なきの徒をして洋行せしむるよりは、寧ろ盲人をして窓を覗かしむるを優れり。とす。乍去既に確乎たる整然たる識見を儲ふるの士は、一たび歐山米水に嘯傲して、親しく其社會文明の眞價を評定する、亦決して妨げず。凡そ知識を完全ならしむるに三個の條件あり、一に曰はく明瞭、二に曰はく順當、三に曰はく精緻。青山を望みて其高低參差を觀るは明瞭なる知識なり、之を認めて夏雲の蒸々と爲さず、乃ち巍峨巒嶽の山嶽と爲すは順當なる知識なり、其高さ幾千尺、綿亘幾十里、懸瀑あり、葱林あり

危嶽の起臥あり、湍水の深々あるを詳にするは即ち精緻なる知識なり
 とす、今識見あるの士は書を讀みて既に少くとも明瞭にして順當なる
 知識を有す、唯夫れ社會の事物や參差錯綜、往々にして百聞一見に加
 ざるの嘆を惹く、喩へば猶懸瀑、葱林危巖、湍水の山に入るを、疾ちて始
 て詳に見るべきが如し、然りと雖も山中の者、往々山勢を知らず、社會に
 生息する者亦往々にして其社會の實勢を解せず、明瞭にして順當なる
 大體に關する知識は、唯識見ある達觀の士之を善くす、佐久間象山の苦
 學せる、結局讀む所の蘭書果して幾卷ぞ、而も五洲の大勢に通曉するこ
 と彼が如くんば亦以て用ゐるあるに足れり、今の洋行者流則ち曰はく、
 亞米利加に十年居れりと、曰はく獨逸に何年留學せりと、而して宇内の
 大勢に至りては、懵乎として、鷗島の畫行くが如き者、之を見ること亦難
 きにあらず、吉田松陰年二十三、之子靈骨有り、高鶴秋晏を思ふ、不幸にし

て志を得ず、而も其をして志を得せしめば、齋し歸る所必ず觀るべき者
 ありしならむ、吾今の洋行者甚だ多くして、天下の獲る所甚だ少きを憫
 む、聊か所感なき能はざる所以に候、

西曆一千八百九十八年秋九月十一日、日東帝國の一書生水城子書劔
 瓢然として、中歐獨逸帝國の首都柏林城に入る時、や正に世界歴史の一
 大重要時期を劃する、第十九世紀の末期に瀕し、此紀世界の一大立物たる、
 鉄の如き、鉄血宰相、比斯麥は死して、其土未だ乾かず、自由主義の一大政
 治家、銀の如き、グラッドストーン亦此年を以て長逝し、而して世界平和の
 一大福音は一週、月前を以て、端なく、年少氣鋭なる、コサツク帝國の首長
 より、軍備制限協定の宣言によりて、傳はり來れり、願て、我本國を觀れば、
 多年識者志士の唱說始めて功を成し、藩閥政府漸く仆れて、不純ながら
 も、政黨内閣新に建ち、政治及社會の面目更始、一新の美果を結ぶべしと

世俗の希望取り、なるの折なりき、相距萬餘里、各在天一涯、道路阻且長、會面安可知、胡馬依北風、越鳥巢南枝、相去日已遠、衣帶日已緩、浮雲蔽白日、遊子不願返、さなきだに旅は憂き者つらき者、江湖の遠に在りて乃ち其君を思ふ、古君子の風なしと雖も、征人萬里感慨亦何ぞ問ふを須るひや。

獨逸は中歐の北部に國し、幅員二十四方哩、人口五千三百万、歲出七億餘圓、輸出入四十億圓、鐵道二万九千哩、國立銀行貸出總高七百億圓、海船實噸數三百万、國富み兵強く、人文夙に盛に開け、商工の業亦近時長足の進歩を加へ、キイルの運河新に成り、僅に千哩に過ぎざる其海岸線を以て、今や將に世界航海業の覇を争はむとす、之を人に喩ふれば、恰も猶青年年三十、學識饒に體格強健、挺然として社會の中原に立ち、大なる抱負と希望とを齎して將に其運命を試みむとする者に比すべきなり、而

して伯林は即ち其首都にして、東西約二里、南北約一里半、百七十萬の人口を有し、街衢宏壯、風俗(外貌上の)端麗、他邦より新に此地に遊ふ者、一見先づ以て喫驚嘆賞を措く能はざる、亦以なきに非ず、佛都巴里より此に入る、彼は初老の佳人の如く、此は青春の才子の如し、彼は優美、此は雅健、而も此の氣格方に盛なるに引換へて、彼は頗る衰憊の微なきに非ざる者に似たり。

伯林の中西部に約百町歩の面積を蔽ふ大森林あり、名つけて動物園(チエアガルテン)といふ、老樹槎枒として鬱蒼たり、洵に是れヘルマン時代の物、今や此都最大の公園地として、滿都の士女常に車馬を此に驅る、その北に王庭(キョエニヒスブラッ)と稱する庭園あり、園の中央嶄然として高く聳ゆる者を凱旋塔(ジイダスゾエ)と爲す、千八百七十一年普佛戰爭凱旋の紀念として、其再翌七十三年の建立に係り、高二百尺、巨大

なる圓柱形の塔上、戦勝神并クトリアの金色巨像、熾然たり、粲然たり、雲色近く飛鳥低く、眞に入荒を睥睨するの概ある者、王庭の東部は即ち國會議事堂にして、王庭と動物園公園との間は坦道一貫、而して其東端を巴朗丁堡門(ブランデンブルゲルトオル)と爲す、門を入れれば即ち伯林の目抜にして、銀座とも麴町とも申すべきウンテルデンリンデン街と相成申候。

詞宗シルレルの「菩提樹畔の逍遙」と題する清艶瀟灑たる小品は、我學生間にも膾炙せる所、此街長さ東西十町、巾約三十間、凡七條の道路より成る、中央菩提樹即ちリンデンの並木あり、其間巾約十間を人道と爲し、其南は疊石の車道、タ、キの車道、及疊石の人道あり、以て南街の軒に連り、北は荒砂の馬道、疊石の車道及人道ありて、以て北街の軒に接す、肩摩穀擊熱鬧の境、菩提樹下僅に一陣の清味を占むべく、夜は乃ち電燈煌々、

士女の來往殊に繁くして、眞個不夜城の觀を呈し候、巴朗丁堡門は巾二百五尺、高八十五尺、全く古希臘雅典のプロポリアを寫せる者にして、ドリック風の圓柱より構成し、風格莊麗、眞に古代建築の粹を抜ける者と評すべく存候、其上に亦并クトリア神像あり、瓊矛と桂冠とを把持し、戰車に御し、驅馬之を牽き、鱗々蕭々の響を聞くが如し、聞説千八百七年那波崙第一世の伯林を蹂躪するや、戦利品として之を巴里に運び去りしが、千八百十四年の回復によりて此像復たび還るを得たり、但し曩には西向なりしもの、此回復の時より東向としたるなりと、門を入れれば巴里庭(バリエゼルプラッツ)あり、庭の東は即ち菩提樹並木の起る所、之より十町の間巨賈店を列ね、而して其東端並木の盡る處、普魯西中興の英主布烈立大王の騎馬像あり、高さ四十四尺、號して歐洲第一と爲す、其南側には獨逸帝國建國の英主維廉第一世の宮殿、皇立大圖書館、樂劇場あり。

り、向ひ側には大學及遊就館あり、之を通り過ぐれば即ち王城橋にして、橋を渡れば王城の建物巍峨又宏壯、蒼然たる古色建築の風趣と相和して一種の尊嚴を加ふ、王城の西に昨年五月を以て開被式を擧げたる維廉一世に對する國民の紀念像あり、王城の北にも亦其父王の騎馬像あり、凡そ王城及宮殿は皇帝不在の際には衆庶の拜觀を許す、維廉老帝が毎日窓より龍顔を出して忠愛なる臣民に拜まれたまへりといへるは即ち此宮殿の事に有之候、是等は皆尋常の町家と同様、直に街頭に臨みて造營せる事故、斯かる事も出來得可く、我邦などの九重の深宮とは全く其趣を殊にして、むしろ朝倉や木の丸殿に我居れば、名乗をしつゝ、行は誰が子ぞ、天智天皇筑紫の朝倉宮の御故事の想ひ出でられ候、凡そ西俗の一見大に我に異なるあるが如く見ゆる者も、少しく之を熟察すれば、我現今と異なるのみにして、歴史上の我國俗とは大に相似たる者多

々有之、而るに我歴史を知らざる輩々の徒は、直に之を以て我の彼に如かざる所以なりとし、喋々沾々の辯を費す者多きは、心得違の甚たしき者、片腹痛き次第に有之候、此君民上下の關係の簡易なるが如きは、其一例たるに過ぎず、社會秩序の整然たる事、男女交際の風俗、禮樂の彬々たることなど、成り上りの政治家の經營に係る成り上りの明治の社會を取りて直に之を彼と比較す、其如かざる者あるは當然のみ、是れ我國の罪に非ずして政治家の責なり、歴史を知らざる者は、明治を云々する猶可なり、到底日本を云々するの資格なき事は、言ふまでもなき事に有之候、但し或る風俗の我日本の過去に實存し、又歐州今日の社會に現存すること、は必ずしも其風俗の善良を立證する者に非ず、是れ亦勿論の事項に有之候、

水城生獨國に入り、伯林に遊ひて、熟く其社會文物の實勢を觀、深く其

興隆の由来を察して聊か得る所ある者に似たり。願て家國百年の運命を想へば、還た感慨に禁へざる者なきに非ず。秋風落葉、暮雲傷心の色、客窓書を讀み罷んで、獨り笥を、巴朗丁堡門下に曳けば、亭然たるギクトリ、ア、新興帝國の歴史と國運とを語りて、遠來遊子の襟懷を憐む者の如く、瑟瑟たる冷風、チエアガルトンの枯林を掃うて、轉た凄其の感を倍す。蓋し一國一人を以て起り一人を以て滅ぶ、普魯西王國が徐に國本を養うて、他日中央歐羅巴の一大覇者の位地を占むるを致せるの基は、其中興の英主布烈の立大王の内政に外交に平和に戰爭に、遍滿周到なる劃策を挾みて着々之を實地に施したるに因由し、爾來國運漸く興隆、威武漸く揚り、新興王國の施措行動は漸く列國の視聽を聳かし、殊に當時中歐の覇者たる維也納城の皇帝及其政府の注目を惹くに至れり。然りと雖も、天の將に大任を是人に降さむとするや、必ず先づ其心志を苦しめ、其

筋骨を勞し、其體膚を餓し、其身を空乏にす、個人と國家とに論なきなり。是を以て、虞舜は父の頑弟の愚に困阨して、遂に四海を有ち、文王は羗里に拘せられて、姫周の帝業茲に成り、希臘には波斯二百萬軍の襲來あり、羅馬には貴族の專制壓虐あり、皆大に其内に在る所の者を淬厲振作して、其大發達を促進する所以に非ざるはなし。今や新興の普魯西王國亦此運命に遭遇せり、佛國革命の爆發餘力を域外に縦にして、全歐の平和茲に破れ、東僅にライン一帯の水を隔つる北獨逸の諸邦は直に兵禍を蒙り、時や恰も埃帝の權威寢く弱く、聯邦統一の實漸く衰ふるの時に際せるが爲に、那玻璃崙の武威忽ち中歐に振うて、憐むべし。ホオヘンツォルレン家新興の覇圖亦中道夙く摧折の匪運に遭はむとす。東亞の哲人陸象山王陽明と略々其學說を同しうせる近世の大哲學者、ヨオハン、ゴットライプ、フイヒテがイェナ大學の講堂より書帙を投して起ちて軍

に從へる千古の壯事も亦此時に在りし者。時利あらず戰敗れ、普魯西王國亦竟に唯伏の屈辱を蒙りしも、王布烈的維廉第三世及皇后路易施賢にして人を愛し、民心曾て離畔せず、國本却りて鞏固を致す。驕陽烈日遂に能く久しからず、那玻崙の没落と共に中歐の形勢俄然として其面目を一變し、而して干戈落々の間に賢明なる父王、淑徳ある母后の教育を受けたる好望の王子は、やがて嗣立して普魯西王の位に即き、獨逸人が誇揚頌贊の套語たる戰勝光榮の九十一年は茲に始まり、臨むに維廉大帝を以てし、輔くるに宰相比斯麥、將軍モルトケを以てして、千八百六十七年七月一日北獨逸同盟茲に成り、普魯西其盟主となり、奧太利は其外に出で、而して獨逸帝國の基業全く茲に成る。既にして西佛蘭西亦漸く其内政を振張し、功名心の結晶たる那玻崙第三世、大に武を輝かすの志を蓄へ、茲に新興の普王と衝突し、乃ち獨逸祖國の呼號千八百七十

年七月廿五日となり、我忠愛なる臣民の呼號(七月卅一日)となり、普佛戰爭茲に開けて、遂に普國の大捷に歸し、九月一日及二日セダン戰爭、佛帝那玻崙白旗を樹て、普王の軍門に降るに至り、而して普國の雄圖全く成り、遠くは以て國民の深讎を報じ、近くは以て國家の威武を輝かせる。普王維廉は、一千八百七十一年一月十八日を以て新に獨逸皇帝の位にエルサイユの王宮に即き、而して今の獨逸帝國茲に建つ。皇帝維廉は明治二十一年を以て崩し、公爵比斯麥亦今年を以て薨す、其一生の事業や實に獨逸帝國の霸業に存して、大小の劃策施設皆之が爲に行はれたる者、昔者管仲齊桓に相として、諸侯を九合し天下を一匡す、今や第十九世紀の中歐に於ける管仲は、真に比斯麥其人を以て擬すべき者と存候。凡そ大人豪傑の一生に於ける、其事業必ず一貫の目的を有し、生涯百般の行動云爲は、皆此大目的に向うて集注す、卒然として之に接すれば、

其平生の爲す所必ずしも大に尋常に異なる者あらざるも、一生の事業遂に克く遠く人群を絶する所以の者は、亦唯其生涯の組織的体系的なるが爲のみ、彼の朝に個人主義を唱へて夕に正反對の主義に變し、昨は歐化主義に狂奔して今は日本主義を唱道するが如き輕薄なる自殺的論客は暫く措くも、一貫の目的なく、一統の體系なく、遑々焉として朝三暮四、日計月計に齷齪として百年の大計を慮るの遠略なき者、何ぞ以て國家の重を寄するに足らむや、而して從來我國の所謂政治家なる者、唯操縦の術策を是れ重しと爲して、國家經營の要務に至りては太た心に關するあらず、乃ち能く彼の輕薄者流たるを免るゝ者と雖も、亦竟に能く此遑々者流の群を脱する者少く、政治家多くして國務舉らず、社會は却りて其煩擾に堪へざるの崎觀を呈するに至る、誠に憤を發すべき仕儀と存候、比斯麥を氣取る者、グラツドストンを氣取る者、モルトケを氣

取る者、明治の政界は實に大小の氣取り屋俱樂部と名づくべく、沐猴にして冠する者、一旦權を得るや、乃ち亦社會を率ゐて沐猴冠の社會と爲さむとす、明治の文物風俗等之を舊幕時代に比すれば、成る程一變せるに相違なし、而して彼沐猴者流、乃ち我三十年間の進歩實に宇内に匹儔を絶すと誇稱し、世の近眼者流亦紛々として之に雷同するも、之を熟察すれば、是れ唯梅幸早代りの類に過ぎず、忽にして袖萩たり、忽にして教氏たるも、梅幸は依然たる梅幸のみ、明治の文明を目して安定なる文明と爲すは、其蟲の善さ加減殆ど窺測すべからず、吹けば飛ぶ様な文明とは、明治文明の事に可有之候、獨逸帝國五十年の進歩は眞個國力の進歩文明の進歩なり、明治三十年の所謂進歩は變改に過ぎざるのみ、其皮相の變改を除き去らば、實質の進歩として剩す所何程も之なき者、漫に朝鮮支那の改革沙汰を冷笑ひながら、高樓酒を呼び阿嬌を侍らして比斯

麥なごを氣取る間に、少し管子纂詰でも讀むが宜しとは、此處の事に有
 之候。乍去既に功を成せる者は、當然國民の感謝を荷うて以て去るべき
 のみ、今よりの政治家志望者は、宜く大に省る所なかるべからずと存候。
 從來我國人の獨逸や比斯麥を見る、頗る唯其一面を觀るに過ぎざる
 に似たり、比斯麥といへば鐵血宰相といふは、辨慶といへば千人斬と思
 ふと同轍の謬なるのみ、辨慶と雖も、鬼若丸の少時には布引瀑の情事あ
 り、比斯麥の政治家たるや、軍政、財政、社會問題、禮樂の事項に至るまで、凡
 そ國家經營の事項、皆其注意を免るゝ者なし、抑亦之に非ざれば、斷じて
 以て國家の興隆を期す可からざるを以てなり、然るに幼稚なる政界の
 常として、往々軍備擴張主義、實業主義、農民保護主義、商工獎勵主義、社會
 主義などいふ者が、各政治主義として現れ出づる者、我國の政界亦其氣
 味なきに非ず、曰はく比斯麥は社會主義を獎勵して以て國家を隆盛に

せりと、曰く獨逸の獨逸たる所以は、軍備擴張主義の賜なりと、是れ佛骨
 を迎ふるの類のみ、抑亦當世流行の科學的研究の遺弊か、是の如き者
 亦將來政治家の脱却すべき事項と存候。
 然りと雖も、管仲は曾西の爲さざる所、孟子の以て公孫丑を詰りし所
 比斯麥や管仲や、其行ふ所は、覇者の事に過ぎず、孔孟の徒の以て小と爲
 す所、歐西の學界亦王道を論ずる學者なきにあらず、露帝今回の申出の
 如き其眞面目なりや否やは、暫く措き、兎も角、這般思想の系統より其名
 の正しきを承け得たる者に有之候、雖然王道は政治の大乗なり、未た之
 を以て我政界に説くべきには無之候。

或は云ふ、進自兩黨の合同の速に成りしは、天下の以て意外とせし所
 流石に伊藤侯は直に此勢を制して、早速内閣の明け渡しを爲し、以て隈
 板諸氏に不意撃を喰はせ、隈板諸氏は此勢を制する能はず、直に乗せら

れて遂に失敗に了へたり、流石に伊藤侯は大人にして隈伯板伯は小兒なりと乍併小生は這般の計較を爲すを好まず、假令此の如き者ありとするも、是れ政治家に於いて何ぞ妨げむや、隈板内閣の失敗は伊藤氏に乘せられたるの罪に非ずして、其出處の大節に由らりしが爲なり、君子は欺くべきも陥るべからず、陥れるは其人の自ら立つ所なきに坐するの過のみ、他の以て我に乗ずる所以の者なきを待ますして、我の以て他に乘せらるる所以の者なきを待むは孫武の兵略なり、政治家の天下に立つ亦須く此正々堂々の氣象なかるべからず、政治は奕基に非ず、若し政界を以て人を乗せたり乗せられたりするの舞臺と爲すか、日本國民は未だ數億金の木戸錢を拂うて之を見物する程の富を有せざるを、奈何にせむ、板垣氏は從來屢々人に欺かれ亦往々陥れられたる人、大隈氏は較、欺き難く陥れ難きの人、而して其尤も難きは實に伊藤氏な

らむか、而も社會若し是が爲に伊藤氏に擬するに大政治家の稱を以てせむとする者あらは、我國の政治は終に奕基に歸し了らむのみ、是れ唯伊藤氏が隈板諸氏に比して少々許り博才に富み、相場師根性の強しといふに過ぎず、天下を負ひ萬民を安んずる堂々たる政治家に責むるに博才と相場師根性を以てするは、余輩の與せざる所、但得失を以て榮辱と爲さざる位の決心は、大小政客の普く有する所となりて欲しき者に有之候。

輿論政治なりとて天下愚人のみならば國政の補益上何の効も無之、國運の進張の爲には、其政體の如何を問はず、必ず賢人君子の大政治家として立つ者出でざるべからず、獨逸最近の歴史亦これが一證を供申候、教育を以て迂濶となすは非、迂濶を以て教育に任ずる更に非、聊か識者の注意を惹度存候、頓音。

郷友に寄す

戊戌十一月十一日於柏林

六十六
水城生

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 水城生 and 寄す）

客窓瑣談

（在京同人に寄す）

水城子將に郷を辭せむとす。一友贈るに言を以てし、曰ふ、吾子今將に西遊萬里、思ふに更に島國的根性を脱却し、他の美を認め、自の醜を知り、學識長進を加ふる者有らむと。水城子曰ふ、借問す、所謂島國的根性とは何の謂ぞや。日本は島國なり、英國も亦島國なり、希臘羅馬は半島國なり、フィニシア、カルタゴは皆海岸國なり、若し固陋偏狹を目して島國的根性といふか、是の數國民は尤も寛裕濶達、遠地を略し、國富を致す、洵に歎美す可き者、史に稱す、皇祖神武帝、性明達、意豁如たりと、然らば、則ち島國的

客窓瑣談

六十七

寛裕濶達の氣象は我が始より固有する所なり、近者の所謂島國的根性なる者は、特に愚物が自ら卑うし自ら屈するの語のみ、他の美を認め自の醜を知る、河を必すし、遠航目撃を俟ちて而して後にせむや、士の書を讀む、固より己に此の爲のみ、苟くも眼光紙背に徹する、精緻の知識、猶或は之を欠くも、而も明瞭順當の知識は、固より既に之を有す、必ず足、歐米の地を履むを、俟ちて而して、後に、歐米を知る、といふか、則ち堯舜の時に、生れ、孔孟と臂を交へて、徴、逐するに、非ずんば、以て、堯舜、孔孟を知る、能はざらむ、是れ、殆ど癡呆のみ、吾子それ裁する所を知れと、友唯々。

二

水城子伯林に入る、居ること一月、頗る亦先遊の邦人に逢ふ、往々子に勸めていふ、此地氣候甚だ勤學に適せず、如かず、徐に語學を修め、歸朝の後大に讀書の資を作らむにはと、所謂語學は日常の應酬と坐作進退の

細節との謂なり、在歐先遊の後遊を率ゐる、其惻切率ね此に類す。

三

戊戌十月七日夜、在伯日本人會開かる、講談師松林伯龍あり、東洋諸港を歴遊して遂に巴里に航し、今偶、來りて伯林に在り、此夕出演して餘興を添ふ、力士越の海勇三の孝義談、忠臣藏七段目の正史實傳等、すへて三席を講す、歐西の邦人社會、復忠と孝とを言ふ者なし、蓋し東邦野蠻の俗なればなり、伯龍は、眇々の侏儷、乃ち敢て此談を爲す、所謂其愚や眞に及ふ可からざる者。

四

伯林講談師なし、大抵俚談を歌曲と爲す、我浪花節の如し、而して押韻整然、然れども、是れ、歐西藝術の長所、而して復、短所なり、建築、舞踏、皆對稱、比例を尙ふ、復、活動の韻致なし、譬へは、猶、罨紙内の書の如し、唯、婦人頭髮、

を、理、す、る、我、に、在、り、て、左、右、全、く、相、對、稱、し、歐、西、に、在、り、て、は、殆、ど、常、に、對、稱、
 を、作、さ、す、之、を、例、外、と、爲、す、の、み、俗、間、の、舞、踏、多、く、足、を、役、す、錦、輝、館、活、動、寫、
 眞、に、見、る、所、の、如、し、之、を、書、に、譬、ふ、歐、西、の、舞、踏、は、金、釘、流、な、り、我、能、樂、は、草、
 書、な、り、而、し、て、我、舞、樂、は、則、ち、假、字、體、な、り、是、れ、獨、り、舞、樂、を、謂、ふ、の、み、に、非、
 す、亦、以、て、音、樂、を、謂、ふ、可、し、語、に、云、ふ、長、袖、善、く、舞、ひ、多、錢、善、く、買、ふ、と、歐、西、
 の、舞、妓、衣、に、袖、な、く、玉、手、全、く、露、は、る、時、に、其、短、裳、を、褰、け、て、以、て、舞、袖、に、代、
 ふ、則、ち、其、善、く、舞、ふ、を、求、む、る、寒、士、錢、な、く、し、て、善、く、買、ふ、を、欲、す、る、と、一、般、
 一、嘆、を、發、す、べ、き、の、み、

五

其國に遊び、其史を讀む、史蹟國勢と共に活き、躍々として我眼前に生
 動す、善いかなシイレイの言、曰はく、政治は現今の歴史、而して歴史は往
 時の政治なりと、豈唯政治なるのみならむや、讀史眼は觀勢眼に頼りて

全く觀勢眼は讀史眼を待ちて成る。

六

己を知り他を知るは、處世の要訣、而して國交の道、亦以て異なること
 無し、然れども知ることは、目、親、耳、聞、の、謂、に、非、ず、知、る、は、心、に、體、し、て、神、に、
 察、す、る、の、謂、な、り、國、外、に、遊、ぶ、者、往、々、外、邦、事、情、の、知、り、難、き、を、謂、ふ、外、邦、事、
 情、洵、に、知、り、易、し、と、せ、ず、而、も、亦、道、有、り、史、書、を、讀、ま、ず、し、て、卒、然、外、邦、に、入、
 る、刀、を、手、に、せ、ず、し、て、牛、を、解、か、む、と、す、る、が、如、し、庖、丁、と、雖、も、之、を、奈、何、と、
 も、す、る、こ、と、な、け、む、目、を、閉、ち、て、視、耳、を、掩、う、て、聽、く、難、い、か、な、外、邦、事、情、を、
 知、る、こ、と、

七

大抵獨逸大學の講義、特に大學々生及一般庸俗の爲に筵を開く、單簡
 淺近、固より著書の比に非ず、著書や蓋し學者心血の灑く所、知己を千載

に、歎つ所以の者なり。今、我、海、外、留、學、生、概、ね、既、に、我、帝、國、大、學、を、卒、業、し、研、鑽、數、年、宜、し、く、妄、に、自、ら、菲、薄、し、て、永、く、學、界、の、執、鞭、を、以、て、甘、ん、ず、べ、き、に、非、ざ、る、な、り。歐、西、大、學、の、我、大、學、に、優、る、は、唯、其、教、授、に、老、儒、碩、學、の、多、き、を、以、て、の、み、其、門、流、豈、盡、く、我、に、優、ら、む、や。獨、逸、大、學、卒、業、試、驗、の、制、殆、と、我、工、科、大、學、に、同、し、在、學、三、四、年、論、文、一、篇、試、問、若、干、乃、ち、可、故、に、獨、逸、大、學、の、卒、業、生、所、謂、ド、ク、ト、ル、を、博、取、す、る、者、宜、く、我、學、士、と、比、倫、す、べ、し。且、邦、人、の、此、地、に、遊、び、て、ド、ク、ト、ル、を、博、取、す、る、者、大、概、試、驗、論、文、の、題、目、を、東、洋、の、事、項、に、取、る、曰、は、く「教、育、者、孔、夫、子」曰、は、く「萬、葉、集、の、美、學」曰、は、く「日、本、貨、幣、制、度、の、沿、革」、こ、の、類、皆、歐、人、の、未、だ、知、ら、ざ、る、所、而、し、て、試、驗、は、則、ち、容、易、に、通、過、す、べ、し。一、旦、歸、朝、す、る、或、は、自、ら、博、士、と、呼、び、大、博、士、と、稱、し、俗、衆、と、學、界、と、共、に、瞻、仰、敬、畏、す、何、ぞ、其、迂、な、る、や。學、問、の、獨、立、識、者、思、は、ざ、る、可、か、ら、ず。日、本、學、士、の、體、面、遊、學、の、徒、省、さ、る、可、か、ら、ず。

八

大、丈、夫、須、く、大、不、平、を、懷、く、べ、し。或、は、ニ、コ、ラ、イ、會、堂、の、鐘、聲、に、不、平、或、は、帝、都、道、路、の、泥、濘、に、不、平、何、ぞ、其、膽、の、小、に、し、て、其、量、の、狭、き、や。然、り、と、雖、も、大、不、平、や、惟、達、見、深、識、の、士、之、を、能、く、し、達、見、深、識、や、惟、篤、學、力、行、の、徒、之、を、致、す。昔、者、孔、丘、一、た、び、大、不、平、を、懷、き、而、し、て、斯、道、賴、り、て、以、て、傳、は、り、釋、迦、一、た、び、大、不、平、を、懷、き、而、し、て、一、切、衆、生、賴、り、て、以、て、淨、土、に、入、り、基、督、一、た、び、大、不、平、を、懷、き、而、し、て、歐、西、文、明、の、基、乃、ち、立、つ。比、斯、麥、の、獨、逸、肇、國、に、於、ける、華、聖、東、の、米、邦、獨、立、に、於、ける、列、拙、夫、の、蘇、士、運、河、に、於、ける、是、れ、皆、近、世、の、善、く、大、不、平、な、る、者、な、り。應、心、浮、氣、輕、舉、妄、動、は、君、子、與、せ、ず。若、し、夫、れ、不、平、を、鬻、い、て、以、て、衣、食、す、る、は、猶、色、を、鬻、い、て、以、て、衣、食、す、る、が、ご、と、し、近、時、我、國、の、文、壇、所、謂、雜、誌、者、流、是、の、み。

九

十月七日、伯林の北端に在るフムボルトハイム公園に散策す、北地の秋色、天碧に風冷に、落木蕭々たり。此處は中央なるチエルガルテンとなりて、紅紫紛々の盛なく、輿馬、驕なし、園中嬉戲する者多く、是れ労働者の子女、玩ふ所は、落葉、繩屑、土砂の類に過ぎず、徘徊、脚蹴する者、皆一種陰鬱不平の面相を具へ、曇々然として、喪家の狗の如し。一労働者に乞ひて其携ふる所の新紙を覽る、メタルアルバイタル協會の機關紙なり、返さむとすれば取れといふ、報ゆるに小銀錢を以てす、固辭して受けず、金錢の貴きを知る者は寧ろ廉なり。物質的需用之を充たすこと易く、而も之に應ずるに資なし、社會の四圍の事物、刻々其頭腦を刺戟して貧の苦を覺らしむ、社會問題の起る亦已むを得ざるなり。

十

英國にては、公吏議員等となるに別に制限を設けず、唯其「ジエントルマン」

「ン」なるを以て必要充分とすといふ、さて所謂「ジエントルマン」は中々やましく品性あり、品格あり、品行ある人士に非ざれば、到底「ジエントルマン」の社會に齒せらるゝを得ず、獨佛等の交際社會亦皆然り、衣服の端嚴、應對辭令の嫺雅なるが如き、皆この品性、品格、品行の外面に發露せる者に過ぎず、所謂「ジエントルマンシップ」は畢竟内部精神的の修養たるに他ならず、是等各國の社會は、別にやかましき道德の法則を説き立てざるも、「ジエントルマン」たる者にさる事ありて宜からんや、その一言を以て自他を匡正すといふ、是れ恰も我國往時の「武士」たる者が「といひしと同じ、唯獨逸にては學生「シトット」を以て此符牒に當つるの觀もある様なり、今明治の社會に處するも、我同人社會は先づ宜しく「士」を以て自他を責むるを要すべきか、繁瑣なる名教儀法の末を以て、青年を拘束するは、決して眞個教導啓發の所以に非ざるべし。

洋行歸りの輕薄兒が、往々社會より指彈せらるゝは、外面の發露を以て、修養の眞髓と誤解するが爲なるべし。今の所謂紳士とは是等の謂にして、一見頗る「ジエントルマン」に似たれども、其議論は吹けば飛び、其好尚は齒が浮き、其利に就くや素町人根性を露はし、其體裁ぶりながら意氣地なきは若且那氣質其まゝ、其外貌に全力を注いで得意なるは氣取り屋の本性、少しく才あれば抜け目なく利得を攫み去ること、火事場稼ぎに似たるは、犀取り男の標本たり斯かる紳士を目して「ジエントルマン」といふ猫を呼ひて虎と做すの類なり。吾々青年の理想とすべきは眞個の「ジエントルマン」即ち「士」これなり。苟くも品性品格品行の精神的修養ある、辭令應對起居動作の如きは、自ら發して、皆節に中らむ、沐猴にして冠すとは、所謂紳士の「ジエントルマン」ぶる事の謂なるべし。

若し夫れ動作形式の末に至りては、「士」と「ジエントルマン」と自ら社會人種等に關鍵する、多少の異同あり、歐西の言語迫促、而して談話は低聲に喃々するを尙び、我「士」は尤も音吐の高朗暢達を尙ぶ、是れ語言の體然らざるを得ざればなり。歐西の俗「士」は婦女に媚侍するを要す、我は唯婦女を敬すれば足るなり、此類皆末節にして、彼此相害ふ可きに非ず。本原の修養如何と顧ることなきときは、淺薄なる基督教徒が、歐俗を誤りて基督教儀と爲したると同弊に陥らむ。

夏六月二十日夜近衛公爵の來伯を機とし、日本人會を開く。公爵起ちて演へて曰ふ、余が獨逸に遊學せしより、今殆と十年、此間獨逸社會の變遷を願れば、國力の偉大なる伸張の以外に於いて、亦社會風俗の著しく

華美に趣き、好尚の頗る優麗に、進みて、復當年質實粗剛の趣を看さるに、似たり、これを進歩といふ、亦妨なきに似たるも、而も這般外面の變遷開展に伴ふたけの内面實質に於ける進歩ありや、猶多少の疑點を存せずんば、あらず、此國在遊の邦友諸君子、亦自個の修養に於いて、省る所を知る可しと、春日の神威、談山の神徳、蓋し今に於いて墜ちざるものか。

十四

十二月十七日夜、和獨會大會盛に彼我兩邦の貴賓を招待して聖誕を祝す。一獨客あり、一清客の辨髪を拉していふ、君何故に此豚尾を附する、傍に一邦人あり、獨客に反問していふ、君何故に此衝天の髯を作る、衝天の髯は所謂キルヘルム髯なる者、而して、此清客は實に駐獨清國公使館の高等官なり。

十五

三月二十一日は吾が誕辰たり、早曉僑居の主婦團を叩いて入り、燃ゆるか如き躑躅一盆を贈り、祝して曰ふ、誕辰宜く曉眠すへからず、晨起壽福を長せむと、既にして兒女長幼悉く至り、各贈るに草花あり、以て門監の妻兒に及ぶ、此夕仍りて此兩家族を招飲す、酒酣にして、主人語りていふ、日本は極東の文明國たり、歐州を距ること數千里、乃ち這開化を見る、吾人の驚異する所、歐州諸國復敢て手を其邊疆に觸る、こと支那の如くならざるなりと、吾乃ち叱して曰ふ、洵に然り、日本自ら關鑰あり、以て自ら衛るに足る、大盜且窺踰の念を絶つ所以と、噫、僑居の主人は一縫工のみ、學なく、識なし、且其意亦實に日本近時の進運を讚稱するに在り、而して其失體乃ち此の如し、歐西民衆の東洋を視る、誠に以て見る可きなり、歐西の東洋を識らざる、乃ち歐西の蒙のみ、而して輕侮の念亦由來あり、留學生の派遣、備聘外國人の來朝、亦其中に居る、文運獨立の事、努めざ

十六

我○國○の○獨○立○せ○ざる○や○久○し○學○術○自○立○せ○ざる○則○ち○曰○ふ○留○學○生○を○歐○西○に
送○ら○む○の○み○と○艦○船○造○る○を○得○ざる○則○ち○曰○ふ○之○を○英○獨○に○購○は○む○の○み○と○服
裝○定○ま○ら○ざる○則○ち○曰○ふ○直○に○歐○風○を○摸○せ○む○の○み○と○教○儀○典○禮○明○な○ら○ざる
則○ち○曰○ふ○歐○西○の○宗○教○社○交○を○移○植○せ○む○の○み○と○夫○れ○人○步○を○學○ひ○て○而○し○て
行○き○水○に○入○り○て○而○し○て○涸○ぐ○未○だ○自○ら○立○た○ず○し○て○步○し○水○に○入○ら○す○し○て
善○く○涸○ぐ○者○あ○ら○ざる○な○り○此○の○如○く○に○し○て○止○ま○ら○ず○ん○ば○則○ち○我○國○獨○立
の○實○何○れ○の○日○か○能○く○之○を○舉○げ○む○而○し○て○彼○の○我○を○輕○侮○す○る○亦○將○に○底○止
す○る○所○を○知○ら○さ○ら○む○と○す○凡○そ○輕○侮○の○念○は○即○ち○窺○踰○の○心○獨○立○の○事○緒○に
就○く○を○得○ず○而○し○て○軍○備○徒○に○張○る○適○く○以○て○窺○踰○の○心○を○長○せ○む○の○み○嗟○短
見○者○流○何○そ○以○て○經○國○を○語○る○に○足○ら○む○や○

十七

大○凡○そ○獨○立○の○大○賦○依○頼○心○是○れ○の○み○些○の○依○頼○心○有○る○以○て○獨○立○す○る○に
足○ら○ず○依○頼○心○を○萌○蘖○に○芟○除○し○而○し○て○後○獨○立○以○て○期○す○べ○し○是○れ○三○尺○童
子○の○知○る○所○而○し○て○堂○々○國○柄○を○乘○る○者○の○未○だ○曾○て○知○ら○ざる○所○

十八

内○地○雜○居○將○に○至○ら○む○と○す○而○し○て○人○の○準○備○を○説○く○者○近○者○寂○然○と○し○て
聞○ゆ○る○な○し○偶○々○聞○ゆ○る○者○亦○唯○逢○迎○の○細○事○を○講○す○る○に○過○き○ず○雜○居○の○準
備○や○他○な○し○亦○唯○教○育○の○み○精○神○あ○り○氣○魄○あ○り○之○を○勵○行○し○之○を○普○及○す○而
し○て○後○國○家○鞏○し○國○の○教○育○あ○る○は○猶○人○の○道○あ○る○が○如○き○な○り○有○道○の○人○卒
然○と○し○て○之○に○加○へ○て○動○か○す○絞○智○之○を○計○り○て○陷○ら○ず○國○の○防○備○教○育○よ○り
堅○き○は○な○く○國○の○威○嚴○教○育○よ○り○重○き○は○な○し○吾○敢○て○誇○張○の○言○を○爲○さ○ず○獨
逸○社○會○の○過○去○及○現○在○に○看○よ○

第十九世紀、文明、展の最大事件、實に交通の開けて、東西、洋を渾して、一丸と爲せるに在り、世界といひ、天下といふ、語や同じきも、而も義は則ち一變す、曾て之を聞く、我邦洋學の未だ開けざる、某學者實に英和字典を手寫し、以て研鑽に資すと云ふ、當時字典一冊五十金に値す、今に於いて殆ど信ず可からざるに似たり、吾伯林に遊ひ、邦友と會して和食を試む、醬油一圓値一圓半、淺草海苔、數の子、其他皆此に准す、之有るかな、東洋事情の歐西に通せざることを、今に於いて全世界を了解する者、我學徒の措いて、其れ誰そや、

大抵見時流俗の弊、人々妄に自ら菲薄して、大に進取の銳氣を欠くに在り、謂ふ、基督孔子は古の偉人なり、吾及ふ可からずと、謂ふ、ワグネル、ス

ペンサルは泰西の碩學なり、吾及ふ可からずと、謂ふ、ビスマルク、グラツドストンは第十九世紀の大政治家なり、以て我見時の政客を責む可きにあらずと、噫、是れ直に此數子者の未だ踵を接して、我社會に出でざる所以なり、吾少時故國に在り、輿地誌略を讀み、歐州の風物を想ふ、恍として蓬萊瀛州崑崙方壺の圖を觀るが如し、今身此に遊ぶ、亦唯塵寰の一區のみ、高杉東行諸生に訓へて云ふ、吾輩偉人傑士に對する、自然に心悸し、魂慄す、宜く其人燕居逸樂の狀を想像すべし、乃ち平等の感生し、而して怯慄の情滅ひむと、吾輩史を讀み、若くは新紙を讀みて、古今傑物の風采を想望する、亦這個の妙悟有るを要す、否されば則ち偉人の行迹を見聞する、適以て自卑自屈の念を長せむのみ、而して此事社會の短長を較するに於いて、亦言ふ可し、今時流俗、管に以て深く自ら責めざるのみならず、亦隨うて人の深く自ら責むる者を笑ふ、難いかな、懦夫をして志を立

てしむること。

廿一

彼の筍を看すや、必ずしも其中の實を求めず、必ずしも其幹の堅を期せず、直伸邁進、旬日にして既に亭々の姿を爲す、而して乃ち堅と實と、霜風雨雪、自然に之を致す、彼の筍なる者、未だ嘗て始より屑々汲々として、堅と實とをこれ力めざるなり、蓋し筍の性、唯直進これのみ、而して修條勁幹、自ら成る、彼の善く竹を養ふ者を看るに、毎歲秋季、處々其蟠根を截る、蓋し此に非ざれば、以て筍の繁生を期する無ければなり、筍や、洵に陳根蟠錯の地に生ずるを便とせず。

廿二

頃者伯林の一新聞、老男少婦の題を掲げ、冷く投書を募る、其一に言ふあり、云ふ、年齢二十を差ふるの富翁に配せむよりは、寧ろ無資の少壯兵

士に伴はむと、是れ一少婦の投書、而して輿論殆ど之に傾く、歐西の拜金社會、風尚猶且つ然り、人情以て見る可きなり、蓋し人の精力、二類より成る、前進性、保守性、即ち是れ、喩へば、猶骨の膠質と土質とより成るが如し、人の年齒漸く長する、前進性膠質と共に減し、保守性土質と共に増す、而して婚媾生殖を一大關節と爲す、兒子は猶新筍の如し、親の前進性、諸を兒子に賦予す、焉を消退せざるを得むや、青年花風を病ふる、此性未だ身を離れて去らざるも、而も既に一點に偏聚す、譬へば、猶頭腦熱して四肢冷却するがごとし、一國を以て他邦に教着し、崇拜する、乃ち國の花風病なり、是故に愛情の要素、男子に於いては、則ち前進性たり、尤も善く女子に愛せらるる者は、前進的、筍的青年、即ち是れ、諸君若し好男子たらむと欲せば、慎みく、風流軟骨漢を以て自ら擬する、勿れ、而して立國の義に於いて亦鑒る所あらむ。

廿三

青年の品性、尤も善く、婦人關係に顯はる。蓋し食色は性なり、性の存する所は弱點の伏する所、微に觀、邇に察せば、人焉んぞ庾さむや。國は猶人の如し、是故に吾歐西に遊び、頗る其風俗關係を察す。

廿四

歐西の城市、淫蕩の風の浸潤深きは、崇歐者流の一鍼に足る。試に三更以降、リンドン街若くはフリードリヒ街を訪へば、醜業婦の行人を撲つこと、宛も夏の夜の蚊に似たり。伯林中央の廣衢は、夜化して一大動物園（其公園の名にし負ふ）となるといふ。証言に非ざるべし、其甚だしき者は、白晝且横行す、而も多く是れ隆鼻明眸、紅顏細腰、所謂冶容淫を誨ふる者、半開人の此地に遊ぶ者、倏にして魂飛び、神往かざる者なしといふ。水城子の將に故國を辭せむとする、先輩數士の戒言を寄する所、皆一口に出

づるが如し、云ふ、宜く邦人交際を避くべしと。噫、これ將た毎に西遊の人に寄すべきの語か。

廿五

歐人我邦俗の握手接吻せざるを怪み、以て情に冷淡なりと爲す。曾て將校某あり、外科手術を此地の醫師に受く、例宜く豫め麻酔劑を施すべし、某謂へらく、神州男兒の膽氣を示さむは、今に在りと、竟に之を肯んぜず、手術を終るまで、神色自若たり、醫師驚異し、呼ひて痴鈍と爲す。某怫然、而も及はざるなり、是の事今に於いて、在留邦人間の一笑話なるが、抑亦以て東西習俗の殊別を見るべし。凡そ鮑魚の肆、芝蘭の室、居ること久しうして、乃ち其香臭を辨せず、握手接吻抱擁盤舞、此俗之を歐人に見る、固より常事、人之を爲して、毫も心絃の微に觸れず、而も之を邦人に施す、感染鼓激の及ふ所、知るべきなり。而して西俗讀稱の聲、亦隨うて起る。

婦人關係や尤も屢々文學美術に著はる。此事亦國と人とに殊なることなし。吾伯林に遊び、洽く其博物館を觀、汎く全都の風氣に察す、裸體美術の遍行、殆ど豫想に倍す。凡そ彫刻及人物畫、裸體若くは准裸體、十の九に居る。就中婦人九の六に居る。古來男女を弄するの蠻風、弊を今日に遺せる。歴々として徴す可し、而して所謂美なる者、その根抵亦見る可からずや。王城の西に王城橋(シユロオヌブリュッケ)あり、橋欄飾るに赤裸條々たる壯男の石像十數基を以てす。之を聞く、數年前官その風紀を傷るを慮り、腰布を以て之に纏ふ、而して觀者却りて來聚し、官亦竟に之を徹すと云ふ。是に由りて之を觀るに、裸體美術の醜美、西俗亦未だ判斷を全うせざるなり。乃ち其後塵を拜し、漫作冗辯、齷齪屑々たる我國近時の流行甚た厭ふ可し。孔子曰はく、色厲にして内在なる、諸を小人に譬ふる、其れ猶

穿窬の盜のときか、今の文學美術の神聖を唱へ、戀愛の淨裸體の美を論ずる者、幾許か、それ果して穿窬の盜たらざる者ぞ。

獨逸國民謠に云ふ、獨逸佳人皆貞麗、氣如秋霜情若靄、愛國心の養成や、それ女子教育を解る可からざるなり。方今我國女子、品性の教育未た起らず、容姿の陶冶、獨り僅に花街柳巷に存す、二者を兼ね有せざる、其社會的動力たるに於けるや、何か有らむ。遠いかな我女子教育の前途。

社會黨の錚々にクララ、ツェトキン女史あり、一月三十日夜、伯林大學社會學々生會の催にかゝる演說會に於いて演述して曰ふ、現今伯林各種高等學校學生、性病に罹る者四の一に居る、伯林の大道、遊女の疊々として絶えざる所以なりと。之を聞く、伯林の兵營、兵士の婦女を營中に擁

する者大に罕ならず、下士は則ち妻帯營内居住を公許す。獨逸は基督教國なり、其民皆聖教を信ず、其國君國母、近くパレスチナの聖堂に巡禮すと云ふ。

廿九

一老儒語りて曰ふ、日清征戰、我武維れ揚る、喜ふ可きなり、而して吾儕儒流亦得る所有り、孟子國君に對す、放飯流啗而不齒決の語あり、朱子の小學に至りては、則ち特に用語話説の醜汚を極む、孟子朱子は皆賢人道を講する者なり、乃ち此無諱の語を爲して怪ます、是れ吾の平生尤も怪む所、今乃ち支那の社會人情、卑の極、汚の至れるを、聞知し、積年の疑團、忽ち氷釋す、蓋し此に非されば、以て這卑汚の俗を教ふるなればなり、これ亦戰爭の賜のみと、耶蘇基督は一私生兒なり、其夙に人情の隱微に通ずる、亦宜なり、基督曰はく、爾姦淫する勿れ、獨り相接する者姦淫するの

みならず、目を以てする者亦姦淫すと、耶蘇教の所謂目姦なる者、實に此より出つ、吾歐西に遊ひ、郊街に散策す、道路相逢ふ者、必ず流眴睇視す、始めて遊ふや、人をして卑猥の感に堪へざらしむ、蓋し西俗放情無節、基督特に頹俗の時に生る、蹕勵風發、機鋒銳甚、乃ち亦之に非されば、以て其俗を改むるなきを、知ればなり、吾歐西に遊ひ、益基督の快男兒たるに、斯す假に基督をして、我國に生れしめ、は其説く、所必ず此の如くならし、愚なるかな、今の基督教徒、迂なるかな、東來の耶蘇教僧。

三十

獨逸帝國、其國民の品行を以てせむか、我に軼くるに於いて、亦太た難し、それ何を以て、其國勢の堅且實を保つか、曰はく、國民の社會的性格、是のみ何をか、社會的性格と謂ふ、曰はく、衆個人を結合し、一社會を結成する、必ず心的結合性ありて存す、苟くも其存するなき、國土を同しらし、血

族を同しうし、言語を同しうし、嗜好を同しうするも、期世ならずして他人と爲らむ、此性之を社會的性格といふ、之を養ふに道あり、自然力の能く成す所に非ず、何をか之を養ふに道ありといふ、曰はく、宗教、禮儀、美術、教導、之を名つけて社會教育といふ、社會教育と學校教育と、これ即ち社會的性格を養ふ所以なり、然れども、學校教育は固と此に純なる能はず、故に社會教育の功多きに居る、獨逸帝國の社會教育に於ける、太た力めて、竭せりといふべし、惟ふに我國民の社會的性格は、尊王心これなり、然りと雖も、尊王心は我國民の自然に享けて有する所、族制組織の國家之をして然らしめたるなり、而も族制組織の社會的性格に効有る、之を複雜なる社會に期す可からず、之を長年月に期す可からず、是故に、馬子崇峻を弑し、賴朝朝權を篡ひ、義時三皇を遷し、家康禁裏式目を制す、而して民毎に怪まざるなり、近者百年の間、我國民の尊王心、復大に起るの觀あり

る者、乃ち特に一時の象、百世の恒事に非ず、乃ち恃みて以て國家百年の計を得たりと爲す、危いかな、岌々乎たり、況や社會益、複雜に赴くをや、則ち複雑に赴くと雖も、族制組織は我社會組織の根本なり、中樞なり、尊王心の我社會的性格の中核たるに疑ふことなけむ、但それを擯して之を充し、此性格の徧滿透徹、凡そ社會的協同事項、細大洩さざるを期し、而して後國本始めて立たむ、既に尊王心あり、復宗教的統一を要するなし、禮儀、美術、教導、三種の社會教育、新に起り、乃ち茲に太平を歌ふべし、今夫れ朝暮聖影を三拜し、而して午時には、則ち所得を隱匿し、公税を脱して恥つるなし、此の如きの民、百年覆滅を免れば、則ち大幸なり。

卅一

十年前、徳富蘇峯當時流行の政治小説を評して云ふ、是れ寒貧書生夢物語のみ、然れども其汎く行はる、蓋し讀者の言はむと欲する所を言

ひ居らむと欲する所の境を描くを以てなりと、洵に然り、頼山陽の外史に於ける、藤田東湖の正氣歌に於ける、是れ皆、百世日本人の言はむと欲する所、謠はむと欲する所、宜なるかな、其永く行はれて、廢せざるや、然りと雖も、吾輩外史を讀み、淺野彈正少弼、右京大夫、岡崎公、參河守、徳川公、前將軍、東照公の條に至る、少しく慊焉たる者あり、正氣歌、孰能扶植之より以下、興會前半に如かず、是れ其關する所、稍、山陽、東湖自家の境遇に偏して、一般世人に切ならざればなり、仍りて謂ふ、今の詩人文士皆善く胸懷を謠ふ、而も隨うて出で隨うて汎び、汎く天下に行はるゝ能はず、蓋し唯自家の胸懷を謠ふを以てのみ、方、今、日本社會新に蘇す、天下の謠はむと欲する所、何ぞ限らむ、而も今、唯、君か代一篇あるのみ、吾獨逸に遊ひ、和獨會に列す、獨人唱ひ、和人默す、獨人、獨逸祖國の歌を唱ふや、吾毎に正氣歌を以て之に應ず、蓋し天下皆大に謠はむと欲す、而して歌謠あるなし、是

れ天下の同じく歎する所、詩人洵に能く之を供給せば、則ち必ず翹ちうして、天下に飛はむ、而して後、詩人自家胸懷の聲、亦能く相尋いで行はれ、ひ、今の急務、新體詩論に在らず、此沼山の歌に在らず、世繼の歌に在らず、騎馬旅行に在らず、深山の美人に在らず、花影鳥聲に在らず、而して實に日本國民的歌謠に在りて存す、唯、夫れ天下をして謠はしむるは、天下と共に謠ふに在り、天下と共に謠ふは、唯、天下を以て我と爲し、我を以て天下に没する者之を能くす。

卅二

平日事に觸れ感を發する、時に怡然として會通する者あり、是れ吾人中心の聲、而して良知の用を發く所なり、之を社會に觀る、事亦甚だ相似たり、國勢一新の際、哲人、詩人、史家、皆、其特に感發、知了する所の者を以て、社會に呼號す、社會乃ち靡然として嚮ふ所を知る、蓋し此三子者、亦固よ

り、社會中の物而して實に社會の良知なり、其言説や乃ち特に社會良知の用を發く所なるのみ、希臘のホメエロス、ソクラテス、プラトオン、ヘロドトスに於ける、羅馬のシセロ、セネカ、ブルタルクスに於ける、近者獨逸のギョエテ、フムボルト、トライチケに於ける、皆是れ、孔子、基督、司馬遷、源親房、賴山陽、固より特に掲ぐるを要せず、今や我國勢運一新、既に茲に三十年、噫、天の將に大に斯人に俟たむとする、其れ亦養ふ所有りて然るか、抑見時の機運、獨り日東一帝國の更始のみならず、亦實に世界文明の大更始、則ち天の將に偉人を斯世に生せむとする、乃ち將に其先づ坤圓球を打ちて一丸と爲すを責めむとするか。

家庭行事

朝六時半、下女起き出でて湯を沸かし、珈琲を煮る。

七時、主人起き出でて顔洗ひ、モオニングゴウトにて食堂に出づ。夫人は六歳半なる(西洋にては年齢を數ふるに滿何歳といふを以てす)男の子の顔洗ひ着物を着るを手傳ひ、十分許後れて共に食堂に出で来る。

二人の女兒、姉は十歳、妹は八歳十ヶ月なる、大方は其母よりも先に、稀には促かされて、二人の寢室より顔洗ひ衣を整へて出で来る。

寄寓の日本人も出で来る。主人の兄のせむしなるも出で来る。これを伯父さんといふ。

大人は珈琲に牛乳を入れて飲み、子供は牛乳の沸かせるを飲み、小

き丸パンを一個若くは二個、卓上のバターをつけて喰ふ。夫人はパンを切りバターを付け、紙に包みて子供及良人に渡す。試験日なれば子供には乾酪を夾みて與ふ。

七時四十五分より五十分に至る、女兒は女學校に、主人は中學校に行く。夫人は男の子におさらひをなす。

八時四十分男の子中學前修學校に行く。

九時夫人下女を伴うて市場に行き、厨房の品々を買ひ、九時半歸る。

十時家なる人々牛乳を飲む。

一時、夫人下女と中食を仕度す。これを第二朝食といふ。

一時過、學校通ひの三兒、主人も歸り來る。中食、輕き穀物料理一品、輕き

肉料理一品、パンを喰ひ水を飲む。間、菓物あり。

主人休息す。二時過にいたる。往々また再び登校す。これは私立女學校

に内職するなり、歸來作文の添削等に従事す。此間夫人及下女は手藝に従事し、伯父さんは終日かのが室に在りて讀書す。二女は伯父さんに就いておさらひす。

四時五十分臺所晚餐の準備始まる。五時各室第一鈴鳴る。晚餐に赴くの用意を促すなり。五時十分第二鈴鳴る。皆々食堂に集まり、晚餐始まる。これを中食といふ。羹一品、肉一品、野菜一品、パンなく、馬鈴薯を喰ひ、水を飲む。大抵生菜若くは熟菜あり。五時半了りて、大人は主人書齋の樓椽(バルコン)に小卓と椅子とを持ち出だし、眼下に街道人馬電車の往來を瞰しつゝ、珈琲を飲む。往々六時より主人夫婦、二女一童、日本人と散歩に出づ。チエアガルトンの邊に向ふを多しとす。七時半に歸る。

八時より入浴。月曜は主人、火曜は夫人、木曜は子供、その翌日洗濯。土曜は日本人。

八時半、子供寢に就く。

九時、大人のみ夜食、これを晚餐といふ、バター付きパンを食ひ、麥酒を飲む。十時若くは十時半まで話す、伯父さん尤も善く語る、歴史に地理に、社會百般の事に詳なり。

十時半、皆々寢所に入る。

日曜日には右の中食即ち晚餐を午後二時に取り、四時珈琲に菓子あり、四時半家族舉りて、多くは下女も同伴、近郊に散歩し、八時歸りて晚餐以て寢に就く、これが普通獨逸の食時なり。

水曜夜七時よりを主人面會日とし、その同僚、主人内外の舊知、日本學士等來訪、パンに肉を加へたるもの(我邦の酢の如し)を喰ひ、麥酒を飲み、大概夜半に徹す、來客にして往々夫人同伴の者あり。

右は伯林モアビイトなる吾が寓グロオト君の家庭行事なり。主人名

はアアドルフ、シエリインの人、エンデンに屬し、年四十四、ストラスブルグ大學のドクトル、フロゾフェにて、曾て明治十三年より十八年まで我東京大學に聘せられ、一八八七年より中學教師となり、現に伯林のルウイイゼンギムナジウムに教諭たり。夫人ルウイイゼ年三十七、漢堡の人、夙に小學校正教師となり、奉職五年、高等女學校教師の資格を求め得るに達せる際、グロオトに歸きたるなりと語れり。伯父さんエミール、少うして普佛戰爭に従うて巴里の園に與かる、凱旋の後、脊椎の病を發して痾癘となる、現に弟の家に同居し、時々新聞紙に寄書し、尤も吾が間に答へて詳なり。長女ヘドキヒ、次女ゲルトルウド、共にドロテエン女學校の生徒たり。一男エルンスト、其父の學校に通學す、尙一年生なり、此子初めハインリヒといふ雙生兒の兄弟を有せしが、六月廿九日ハインリヒ死して、單獨となれり。水城子年の五月一日を以て此に寓す。

四月三日皇祖祭日、遊于伊都入江、
江連白旗池。

夕されば、樂浪さむし。白旗の、
いつの入江の、春淺みかも。

或問

(在京同調と贈答す)

○或ひと問うて云はく、インノセンス(暫く無邪氣と譯す)の價值品位如何。答へて曰はく、無邪氣は品性の消極的造詣なり、無邪氣はこれぞと非難すべき所なき品性なり、無邪氣には偽なく、悪なく、醜なし。然れども是れ未だ人間品性の極致にあらず、更に真、更に善、更に美なる者、品性造詣の期す可き所に在り。ソクラテスの道義を明にせる、ナイチンゲルの仁愛なる事業、濱路の節に死せる、是等は皆無邪氣より一步を進めて、更に品性の積極的造詣に達せる者なり。扱斯かる積極的造詣に達するが爲には必ず消極的造詣を通過するを要するや否や。是れ諸哲人の考にて

可否の兩説あれども、古來斯かる造詣に達せる傑人の經歷を察するに、或は之を通過せる者、或は然らざる者、兩様あるが如し。孔子の繪事後素ハニムコリといへる、英國のロックの素板説ソレユラ、ラアサより割出せる倫理説、老や禪の虛無説は、皆無邪氣の域を経て始めて眞善美即ち聖賢の域に達すべしと爲す者、就中老禪は無邪氣即極致と爲す者なるに似、使徒保羅パウロの如く惡に強き者直に善に強き者は、無邪氣の域を経ずして直に積極的造詣に達せる者の例なるが如し。今日俗界雄飛に志すの士、多く後者に倣うて前者を捨つ、是れ必ずしも咎むべきに非ざるも、眞個の造詣に達せずして半途に止むの虞は誰にもある事なれば、吾人の修養上取るべき針路は、無邪氣に達し然る後更に、積極的に、更に眞更に善更に美に達せむことを期すべし。

○或問云、ファウスト曲中少女マアガレットの其心ならぬ罪惡の爲に淺ま

しき終を見る、無邪氣の可憐なる例とすべきか。答曰、是れ即ち無邪氣の道義的極致ならぬを證する例なり。無邪氣は無事の時には積極的造詣と一毫の差異を見ず、されど他より偽惡醜の誘惑又は迫害として至るとき、内に積極的造詣修養なきときは之に反撥抵抗するを得ること罕なり、即ち無邪氣の未だ至らざる所以なり。ファウスト曲の偉大なるは此邊にも見るべきなり。

○或問云、無邪氣と能力の美との關係如何。答曰、無邪氣は無能力を意味せず、無邪氣は行爲の要素としては方向を決するに消極的なるを弊とするのみ。換言すれば、無邪氣及積極的眞善美、又は偽惡醜は、是れ行爲の定性的要素にして、能力は是れ行爲の定量的要素なり。唯偽惡醜所謂惡に強き者又は眞善美所謂善に強き者は、之を行ふに能力の強大を要すれども、無邪氣は其消極的なるが爲、之を行ふにさまでの能力を要せず。

るのみ。故に能力の美は多くは無邪氣に伴ふこと能はず。

○或問云、我が一生の志望は、功成り業遂げ、老至りて後静閑なる田舎に退き、或は遊獵、或は垂釣に日を消し、悠々と餘生を送るに在り、如何、答曰、是れ甚た可なり、然れど一概に論すべからず、人の志を立つる、修徳は固より生涯の事業なり、立功に至りては、或は生涯の事業なるあり、又然らざるあり、彼力士を見よ、彼の最高なる、即ち究竟的造詣は、必ず三十前後までに在らざる可からず、四十以後筋骨衰へ初むるに際して、長く土俵に上るは、是れ力士としての功業を失墜する者のみ、傾城、優倡の如きも亦此類なり、此等は退くべき時を知らざる可からず、然も多くの文明的功業は、老を以て終らぬ者多し、是れ其多くは主として精神に頼り、筋骨に頼らざるが故なり、就中尤も著しき者を詩人、哲人の類とす、詩人といふも戀愛詩人の如く半ば血氣の役を要する者は固より此限に在らず、扱

文明の進むと共に、精神的能力の修養益、進み、老に至るも衰へぬ工夫は進むなり、蓋し精神とても修養せされば老衰し、筋骨は如何に修養するも老衰の期ある者なり、人生一切の立功的事業は力士、傾城と詩人、哲人との中間に在る者にして、或は力士七分、哲人三分、或は詩人六分、傾城四分と歩合を異にすれども、傾城的力士的要素は老衰の免れ難きを覺悟しつゝ、斯かる要素を伴ふ事業、即ち人生一切の立功的事業は、成るべく老いぬ前に成し了るの覺悟肝要なり、扱所謂退隱の時も、生なま學士の卒業證書を握れる時の如く、我が此世の務濟みたりと思ふべからず、修徳の事は棺に釘うつ時まで存す、扱退隱と蓋棺との間の年月も、力士より一躍して哲人となるべからず、是故に梅か谷は雷權太夫となり、高砂浦五郎は男おとこ帶留おびだまを發明し、シンシンナトッスは外患を退けて再また以農夫に歸り、華盛東は二期大統領の任を終へて、ポトマック河畔の村翁となり、佐藤少

將は隻脚を失うて廣島市長となれるなり。

○或問云、古今諸雄の一生中最美最貴なるは退隱の生涯にあらざるなきか。答曰、否。立德は萬人同様に要道にして、亦美とすべく貴ふべし、立功は其大小と人間社會への親疎とによりて輕重はあれども、小と大と疎とかにて不必要とはすべからず。世の道義衰へたる時、哲人甚だ社會に切近の必要あり、天下道あれば哲人さまた切要ならず、社會に親疎の差別は社會の模様にも倚る、桶屋紙屑拾、皆一個の立功的事業なり、是なくては社會は行立たず、故に哲人の生涯を以て最美最貴の生涯とは未だ言ひ難かるべし。願はくは哲人の如く徳を修め、而して當世最も親にして最も大なる、即ち最も重き功を立てむか。西比利亞を文なしに旅行せる人語りて云はく、バイカル湖畔に一抹の鹽なきに閉口せりと。一抹の鹽、時として一櫛の肉より貴し。マルチンルウテル教法改革の功を立てる

當時第一たりしとて、今の日本にルウテルを極め込み、それ程に大當りするや否やは受合申さず。立功の方面は、宜く時勢の要求を洞察して而る後に定むべし。

○或問云、國家人類を忘れて悠々自適する哲人有り得べしや。答曰、否。如何なる世と雖も、當代の社會は當代の人士之を經營せざるべからず、一社會に人千人ありとせば各人は少くとも千分一の社會經營を負擔せざる可からず。近き喩は納税に見るべし。國家人類を忘るゝは乞食の類なり、彼到底國家人類の外に出づる能はず、即ち國家人類よりは受けて而も與へざればなり。

○或問云、徳と功とは二なりや。一なりや。答曰、究竟は一なり。至徳は必ず大功を伴ふ。如何なる世にても生民社會の爲に立つべきの功なきはあらず、至徳は必ず進みて之を立つるなり。立つべきの功ありて而して立

てざるは徳の未だ至らざるなり。但し如何なる事を大功とすべきかは、世の異なるに隨うて變ず。されど古來未だ紙屑拾の功が洪水を治むる功より重きの社會ありしを聞かず。さりて全く洪水のあるべき様なき國士の人士は、治水を講究する手間に紙屑を拾ふ方増なることもあるべし。扱徳を修むる事は、其自身に於いて既に萬人の生涯離る可からざる事業たり。且是れ又功を立つるが上にも極めて大切なる要件なり。蓋し修徳は人間の社會的生存の要件にして、社會的生存を全うせざるものが社會に功を立て得べき道理なければなり。

○或問云、敬虔と誠實とを以て人生の第一義とする者と、意氣と功名とを以て人生の第一義とする者と、孰れか優れる。答曰、兩方とも半熟なり、兩方とも未だ完全ならず、されど誠意正心は功を立つる先決要素なれば、人は決して之を離るべきに非ず。立功は社會人類中に生活する者の

必然事件なれば、決して之を捨つべきにあらず。唯如何なる世にも修徳なき立功はあり得ず。又時として修徳即ち功業なる世もあれば、甲者を取るべき場合較、乙者に興すべき場合より屢なりと謂ふのみ。吾人人生の第一義は誠意正心より始まり、遂に治國平天下の一部分若くは全体に向うて一介の功を立つるに在り。蓋し甲者は兎角唯心的の人と見ゆ、否則修徳即ち功業なりし時代に於ける哲人の傳記をのみ讀み過ぎたる人と見ゆ。かゝる人は兎角退隱や無邪氣を珍重し、後生を願ふ癖あり。請ふ一步を進めよと説き度事なり。されど功業にのみ急なる有頂天の野心家は、宜しく斯かる人より根本的の修養の說法を聽聞すべし。若し夫れ功名の名に至りては、毎度も言ふ如く、士之宜期者三、一曰徳、二曰功、三曰言、士之宜戒者三、一曰名、二曰利、三曰色、名に急なるなどは言語道斷なり。意氣と敬虔とは相反せざるのみか、全く親近なる者なり。保羅の基

督に於ける、其連鎖は之を敬虔といふも可、之を意氣といふも可、荆軻の燕昭に於ける之を意氣といふも可、之を敬虔といふも亦可、要するに世には絶對的甲者なく、又絶對的乙者あるなし、兩者相輔け相匡^{たす}けて、諸共に社會人類に社會人類の一員たるの道を盡され度事なり。

○或問云、徳は功を伴ふ、熱誠は必ず濟民の事に出でむ、徳を説かば功其中に在らずや、答曰、誠に然り、然れども今日に適せず、今や滔々たる天下、老となく少となく、舉りて名と利と色とに趨走して、役役營營す、説くに徳を以てせば、必ず將に耳を掩うて走らむとす、是れ昔者孟軻の遂に用ゐられざる所以にして、而して今者吾子の屢、實驗する所にあらずや、思ふに世間年少の子、汚濁未だ至らず、活氣内に溢る、宜しく其性の赴く所に隨うて之を善に導くべし、彼方^{まき}に名に急、宜しく説くに功の名の本たるを以てすべし、彼方に功に急、宜しく説くに徳の功の源たるを以てす

べし、而も名や戒むべくして、功や徳や共に期すべし、功や暫く之に就いて、更に其一步を徳に進むるを促がすこと、蓋し青年教導の順風的方法ならむか。

○或問云、吾今懷疑の域中に彷徨す、業務繁にして未だ精思建設に違あらず、之を如何にせば可ならむか、答曰、先づ懷疑以前に自個が有せる所の者に就いて、其取るべきを取れ、懷疑や一朝にして悉く舊物を破壊し了せるも、未だ悉く棄つべからざるに棄つ、而して個中自個の隠然として成立するあり、既に懷疑す、則ち批評的眼孔既に開けたるなり、以て舊物の取るべきを取る、乃ち真個の自個を立つるなり、喩へば猶金製の物品を火災後の灰燼中に探るが如し、是を建設の簡法又要法と爲す、他人の建設取りて自個に移植すべからざるは、即ち斯かる自個が恒存するの一証とも見るべし、但し是れ建設の基礎を置く法のみ、更に之を擴張

進化するの要あるは勿論なり、此等の事、國家文明の革命的進歩に於けるも亦異なることなし。

○或問云、今日の年少、活氣に富み、維新前の諸豪に私淑するが如き好望なる者も、慎重莊嚴の氣魄を欠くあらば惜むべからずや、答曰、誠に然り、活氣や自任や必ず無かるべからず、隨うて私淑も自然に生ずべし、兎角斯かる抱負を新に自覺せる際には、物珍らしく、萬事に圭角^{かきど}立てたがる者なり、されば、斯かる圭角は斯かる好望なる抱負の徵候として甚だ喜ぶべきも、人間は何時迄も子供に非ず、宜しく此抱負をして五體を普く涵さしむべし、斯かる有様は即ち慎重莊嚴といふ者なり、故に慎重莊嚴は活氣や抱負を少々減らすなど匙加減的小せくらしき問題にあらずして、實に人心の奥底の工夫^{くわふ}問題なり、此工夫を成すの便法は、躬行實踐、一々身を其境に置きて考ふるに在り、身を其境に置きて考ふることな

き時は、萬事芝居らしく見えて、淺ましき限りなり、之を名づけて氣取り屋といふ、慎重莊嚴は氣魄にして態度に非ず、慎重莊嚴は氣取りと相容れず。

○或問云、洋行は其穴を探すべしや、將た其美を看取るべしや、答曰、孰れも不可なり、醜美共に見ゆるに非ざれば眞に事物を觀察し得たる者にあらず、但し本國に在る者、多く書籍の上に西洋の知識を得、然るに書籍に見はされたる西洋は、美なるもの多く、醜なる者は書籍に上ること割合に少し、大事は此限に非ざるも、日常の些事に至りては此事多し、さて順當なる知識は活眼讀書の士の既に有する所、洋行の期する所は精緻なる知識に在れば、活眼の洋行者が美事に得る所よりも醜事に得る所多きは當然なり、三人行へば吾師ありにて、美事も醜事も吾師匠としての効力は均等なり、但社會の觀察はさまで容易にあらず、在留邦人の感

情などは容易に觀察せらるれど、外國社會の眞髓などは、餘り速斷速了せざるを可とす。先つ些の美事些の醜事位を當座の話の種とする方かならむ。洋行して只管ひたすらに美事を觀むとする者も、只管に醜事を探し得むとする者も、共に未だ語るに足らざる者なり。吉原見物に行つて來て只管に女をけなすものも、只管に女を譽むる者も、鼻の下の長さは、未だ長短を比べがたかり。

名を厭ふが爲に功までを厭ふ者は退隱を珍重す。
利を厭ふが爲に富までを厭ふ者は貧窮を珍重す。
色を厭ふが爲に妻までを厭ふ者は出家を珍重す。

腐儒佞佛狐禪空老の徒、東西古今往々在り。功、富、妻は社會人類の重大要素なり、之を斷滅するは我道に非ず。

中歐めぐり

その一

紀行又は通信などのいかめしきをもものせむことにはあらず、佛國へ來て既に一月餘りを経たれば、仕事も粗々秩序立ちたるまゝに、故國の知音におとづれの代とて漫に書綴るものなり。

夏もやゝ七月になりぬ。去秋伯林へ着きてより早く十月を閲しぬ。此地にてすべき仕事も大方に仕果たれば、いでや佛國に移らむ前に、教育其他の實地を察し、且は歴史の迹を觀がてら、此國の各地を旅せばやと思ひ居たる折柄、伯林のギムナジウム(中學)は、一樣に七月八日より夏休

となり、そが教師の一人として、我旅の宿かり居れる主人のドクトルグロ
オト(明治十三年より十八年まで東京大學文學部の教師として來朝せ
し人)も、五週間の休暇を、家族を擧げて、母や妹の居なるドブランに旅行
せまく欲するに、君にも同行せられずやと勸むることの切なれば、我が
週遊も彼方より始むること、決めつ、愈々七月十日朝、一行すべて八人、
伯林を出發し、瀛車は北に向うて馳す。

伯林に入りてより、紅塵の外なる清逸の境とては二度ボツグムに遊
べるのみ、中々に都近き田舎は、都の風の到らぬ隈の稀なること、何處も
同じ様なるを、半時一時時の移るまゝに、車窓の眺望全く趣を異にして、
村落の姿、田園の趣、いふばかりなし、されば同行の小兒等が喜は更にも
言はず、そが親さへ伯父さへ召使さへ、籠を出でけむ鳥のごと、翅はたき
囀る様も心地よく見えたり、凡そ一時ばかりは普魯西王國の境域の内

を馳せ過ぎて、メクレムブルグ、ストレリッツ大公國の域内へかゝり、人口
二萬に満たざる其首都ストレリッツを過り、更に二時許にしてメクレム
ブルグ、シエリイン大公國の領内に入る、聯合國家組織なる獨逸内の旅、
は、さながら舊幕時代の日本の旅にも似たらむかし、北獨逸の平原、大方
は、沙地ながら、農耕の事は中々に開けたる様にて、漸々たる麥秀は、亡國
ならぬ興國の氣衆充滿たるべし、此國二千年來の名物とて、處々に一里
も二里も連続せる大なる森林あり、その梢を突きてゴチック風の寺塔
の尖の見ゆるなど、流石に西洋めき、獨逸めき、殊に北獨逸めきたり。

ゲルマニア、森の遠森こほもり吾が行けば、いにしへ語る、ヘルマン
の兒等。

四時にしてロストツク市に達し、更に半時にしてドブランに達す、伯
林を出で、既に四十九里を旅せり、グロオトの妹女出迎へ、輕便鐵道に

て女學校に達す。女學校の校長は季妹アンナ君なり、其姉フリーダ君も教師たり、又其姉のマルタ君は舎監たれば、老母氏もシエラインより迎へられて同居せり。今は此學校も夏休にて其寄宿舎のために築ける室の明き居るを、グロオト一家の避暑に借るなり。アンナ君は曾て英國に遊びて英語を善くし、フリーダ君は巴里に遊びて佛語得意と見ゆたり。固より獨逸の女子師範學校を修め、國の試験を経て、小學校教師の免狀を得、更に五年の後再び國の試験を経て、女學校教師の免狀を得たるものなり。外國の修業が國の試験に相當することは、我國にては今もなほ間々見る所なれど、獨逸にては禁物と知られたり。此女學校は町の有志三人の寄附金より成り、此春四月新築落成し、七十六人の生徒、四人の専任女教師、五人の補助男教師あり、寄宿費學費一切にて、一年四百圓にて事足るといふ。

ドブランは伯林の北約六十里、メクレムブルグ大公家の廟所の地にて、人口僅に五千、獨逸海水浴場の鼻祖と稱ふ。一七九三年に浴場は開けしが、近時戸數三十以上に及べるまゝに、獨立自治躰となりて、ハイリゲンダムと稱し、ドブランとは一里半の隔あり、輕便鐵道を以て兩地を連絡す。ドブランの名所は、八百年古き寺並にカムプ公園といへど、近傍五ヶ所の大森林は更に誇るに足るべく見ゆ。すべて此あたり田舎の趣は外人の多く遊ぶなる大都會とは事かはりて、家屋も三階あるはいと罕なり。人氣も質素なる所あり。ある日森林を散歩せしをり、女學校の生徒八才より十三才許なるが三人遊べるに逢へり、流石に教育者といふものの事とて、フリーダ君は直にわれに日本の話を日本語にてせむことを求めぬ。翌日生徒等は、昨日森にて集めたるなりとて、ヨハンテスベエレンといふ覆盆子をもて來て先生に贈りぬ。土地の風も、教育の風も、こ

をもて一端を窺ふべし。

町に十一年前に新築せるギムナジウムあり、生徒百三十人、教師十一人、校長はハンノオワルの人とて、普魯西主權には反對の人なるよし、教授クラアナアといふ人あり、其妻なる人はシエリインの生れにて、幼きをりグロオト老母氏の親切なる保護を受けし恩誼をもて、骨肉の交あり、時々來往す、七月十六日、夕風の涼しさに獨り宿をたちいでて、麥畑に沿へる菩提樹の下を徜徉して、遂にハイリゲンダムの海濱に出づ、クラアナア教授(ギムナジウムの教諭、年功を経て教授の榮稱を得)一家に逢ひ、諸共に散歩す、教授夫人我國の事を問ひ尋ぬること頻なり、西洋に渡りたまふ前に辮髪を斷りたまへりや、日本にも學校組織ありや、家屋も二階以上なるがありや、などの類なり、凡そ西人の日本を了解するは、主と、其各地の民族學博物館なる日本の部による、此博物館は文明國以外

の民族の風俗を示さむとの趣旨なれば、歐洲各國、北米、合衆國などは入らず、下は大洋洲諸島及亞弗利加の蒙昧なる蠻民より、上は日本、支那、印度に至りて止まる、西人の所謂文明民族に對する自然民族の風俗館なり、我邦の事物も主として維新以前のものを集めたり、維新以後は文明國の仲間に入り、この主意なるべし、且西人の多くは、我舊時の鬚と辮髪との區別をも知らず、又社會の近時大なる變遷をなせるをだに、よく知れるは極めて罕なり、されば是等の質問も、それが適例として興味あり、總して西洋の事物は、わが中學生徒も皆よく知れど、東洋の事物は、西洋の博士學者も之を知るもの罕にして、西人の西洋以外の事物に暗さ加減は、自らを中夏といひ、他をば夷狄呼はりせし古の支那人と見ば、大なる差なかるべく、雪池翁の小言などは、我國人よりもこれら西人の上に適切なるべくや、なぞ思ひつゝ、ゆく程に、東海(バルチック)の暮雲潮音を

催して、風景いごと、壯大なり。教授夫人は流石に優しく、例の獨逸流義の質素なる罐より、麵包、菓子などを出して子供と同じく吾にも侑めなごす。凡そ京都人の遊山の重箱ともいふべきもの、獨逸人にはブリキの罐を布片にて包めるものなり。大方遊山にはこれを持ち行き、珈琲店などに立寄るすらも稀なることにて、藝妓の役は細君つとめ、良人は役者の役。子供は茶番の代用をなし、錢をつかはすに一日遊び、殊に戶外の遊を好むが此國の風と知るべし。

七月十七日、クラアナ家の催にて、田舎めぐりの遊に招かる。グロオト家族すべて十人、クラアナ家族六人、總勢十七人、二輛の馬車にて乗り廻る。こはランドバルチイといひて、西人のいたく好めるわざなり。クレペリイン村を経て、ブルンスハウプテン海水浴場に至り、松林の中を半時が程、アアレントゼエ海水浴まで逍遙す。夕食の饗あり、通例の招待

には、格別の馳走をせぬがならはしなから、面白く語りくらすには、十二分の興あり。三更ハイリゲングムを経て歸る。行程はすべて七里にもなりぬらし。

十八日ひこりロストックに遊ぶ。大學の前にてドブランの小學校長に逢ふ。昔の僧院を學校にせる校の長なり。此人、寺役をも兼ね、獨逸の田舎にて往々見る所なるが、夏休となれるまゝに、神學の講義聽かばやとて來つといふ。この人の案内によりて大學を見物す。獨逸二十一大學の中、メクレムブルグ大公國のは是なり。十時、市の年寄(此市には十四人の年寄あり)コッホ君(グロオト夫人の叔父)を訪ひ、其息ドクトル、コッホの案内を得て、各所を見物す。ロストックは舊ハンサ同盟の一市なりしが、百七十年前よりメクレムブルグ領となれり。人口五萬餘、恰も我新潟に匹敵す。港は入江を浚うて、十六尺の水深を保たしめ、丁抹通ひの要路に

あたる三里にして海に通ずる處、即ちワルキミュンデの海水浴場なり、午後四時此處に遊び、八時ドブランに歸る。北緯五十三度の夏の日の暮れがたく、停車場に待ち受けたる、クラアナア教授の三男ハンス君に伴はれ、晚餐の招におもむく、饗待尤も懇切なり、タシタスの記し、けむ、ヘルマン時代よりの此國民の風も、思ひつべし、饗果て、グロオト一家は茶に招かれて來會し、丘林に對へるバルコン(樓椽)にて、麥酒のみて閑談す、ならはしのまゝに翌日禮に行く、教授夫妻例のいと懇に話す、日本の宗教の話にうつり、問はるゝまゝに基督教の盛衰、其の布教の得失など、所見を加へて評論す、歴史家なる教授は流石によく理會せる様にて、願ふは數日わが家に客ガストロエント友として止宿せられよと、昨夜來のくり言をくりかへしぬ。

此夕はマルタ君の誕生祝として、クラアナア一家みな招かれて來會す、

これはた我が明朝の出發を送る別の筈ともなれり、質素に楽しみ興する、ことは、誠に此國民の長所とや、いはまし、必ず再會をと契られて、わかれしは十二時に近かりき。

七月廿日朝六時半ドブランを辭してシエリインに向ふ、途中キスマアにて乗換ふ、此地は丁抹の要衝にて昔時は大に榮えしが、今は一萬八千の人口を有してメクレムブルグの一都會たり、シエリインは此大公國の首都にしてドブランの西南二十里に在り、大湖を擁し、森林を控へ、風光畫の如し、公城は湖上の一島に在り、ゴチツク及折衷風の建築、湖光に映して、莊麗なり、ドクトル、グロオトの兄パウル君此地に住したれば、其案内に頼りて古文書館、美術館、公城、マリア寺等を見物す、すべて此國にては、普魯西の王城を始とし、王城は木戸錢を取りて、庶民の觀覽を許すを例とす、シエリインの公城も、木戸錢五十錢にて、木戸札の裏面には

案内人へ酒代等を御遣之儀は固く御無用之事とあり、以て風俗の一斑を窺ふべし。城はまことに美麗なれど、半ば未だ造作出來ず、當大公年十八にて遊學中なるが爲もあるべし。公城付屬の庭園も人民の自由に入る様にし、唯小兒はひとり遊無用之事といふ標札あるのみ。文王之園方七十里、興民俱樂部の風土も看なば看られむ。此地人口三萬五千、大學なく、ギムナジウム及レアルギムナジウム(實科中學)あり、折柄夏季休業期とて、この旅行中一切の學校の授業を觀ざりしは遺憾なりき。

その二

茲に北獨逸の都市(中歐の都市は大方相似たり)の相を概していはむに、大方はロストック、シエラインの町と大同小異なり。先づ町の生存上になくて叶はぬ者は、いふまでもなく道路と人家となり、道路は大概疊

石にて造り、車聲輾轆たり、アスファルトのたゞきせるは、少しく大なる市ならではいと罕なり。小町は檐下僅に人道にて、その古きは二間幅の車道も珍らしからず、中町は道幅七間乃至十間位にて、人道車道人道にわかれ、車道の兩側には大方並樹を植う。大町は十五間乃至四十間位なるすらありて、人道車道人道散歩道馬道車道人道とわかるゝが多し、其きは、に並木の四條六條も植ゑ連ねたるも珍らしからず、されどかゝる大街道は、人口十萬十五萬以上などの大都會ならでは、極めて罕に、大都會にても目ぬきの町のみかゝる様にて、大方は中町といふべきものなり。小町は三四百年來の古き町か、または裏町細小路の如き所に限ると知るべし。人家も目ぬきの町にては四階五階立ち並べど、大方は三階なり。二階となれば、中等以上の社會の風流なる住居とて、郊外などに見る所なり。一階の高は大抵二間乃至二間半にて、一丈以下なるは百餘

年前の古き建物に限る。初階は店、二階以上に各々家族住み、屋根の下なる一階には、店主なる商人の家族住むを常とす。二階尤も家賃高く、階に登るまゝに廉きが故なり。家の中央に梯子あり、この梯子は我國の裏長屋への通路のごとく、此家屋なるもろくの家族の公路たり。大抵毎階、此梯子に沿うて入口を設け、左右に各一家族つゝ住むを例とす。小都會にても、水道は必らず、瓦斯さへ大方は具はれば、三階にても四階にても勝手湯殿等の便利は整へり。すべて都會の廣袤は我國のに比して約二分一位なり。たとへば新潟の大きければ、人口は十萬を有するの割合なり。鐵道馬車電氣鐵道の類は、人口二三萬の都會にも大方は備はれり、但しかゝる所にては辻馬車の少きこと、我村落の人力車のごとし。

さて町の辻々には、所々大辻(ブラツツ)あり、東京ならば萬世橋のごとく、新潟ならば古町の新津屋小路角といふごとき所を、四隅の家まで取

拂ひたる如くに、廣き辻とし、此處に芝草草花樹木を植ゑ、腰掛を据ゑ、大方はまた噴水あり、獨逸國又は其都會等に功勞ある偉人の石像等を以て裝飾す。かゝる石像の人物を辻の名とするも少からず、たとへば楠公の像を建てば、楠公の辻、湧井ならば、湧井の辻、遼東の辻、五月八日の辻の類なり。すべて歐西には、紀念碑とて唯文を彫りたる石碑は、墓碑の外誠に罕なり。

都會は自治躰として發達せるが多きをもて、中世以降擾亂の時代を経て、或は外敵に抗し、或は暴征の君主に對して防衛の必要上より、大概は市を匝りて城壁ありしが、北獨逸の都會は今より五十年乃至三十年の間に大方これを取毀ちて、樹木草花芝草を植ゑ、土地の凸凹にかたどりて園池を構へ、樂しき園生と化し成せるを例とせり。昔の城濠あるところならば尤も妙なり。ハムブルグにては其一部を市街貫通鐵道の敷

地に充てたり、中武鐵道の四谷驛より飯田町驛にいたると暗合すといふべし、ブレエメン、ブラウンシワイヒの散歩道は尤も清雅なり。所々に残れる舊城門の古色あるは昔ゆかし、リュウベックの如き、フライブルグの如きは其例とすべし。全く城壁を保存して今尙いかめしきはニエウルムベルグに見るべく、キョエルン、ストラスブルグの如きは、今尙新に防備を嚴にす、巴里も亦この類にて、伯林は城壁を徹したる迹大方は整然たる市街を成せり。

凡そ中歐の都市を理會せむには、自治制を了會するを要目とす、我封建の御城下として成れる都會とは全く異にして、先づ泉州堺などの類に近かりしものと思ふべし。されば城ありて市あるにあらで、市自ら營むための諸機關、市自ら衛る爲の城壁なり、市の體面など思ふ心もいたりて、強く、一家といへば、玄關、座敷、床の間、庭園、戸締、御内佛が必ず相應に

必要なり、といふが如くに、都會になかるべからざるものとて、遊園、美術館、工藝館、市場、寺院、市役所、取引所、共同墓地はいづれの都市にもこれあり、中にも寺院は中世に尤も莊大を極め、以て他の都市に拮抗し、自らの誇りとせり、現にリュウベックのマリア寺は、該市が昔ハンザ同盟の牛耳を執りし頃、羅馬の法王院ワチカンに對峙せむとて建立せるものなりといふ、鼎軒博士の奈良大佛論と暗合せる事實といふべし。遊園には、大方數千人を容るべき、大料理屋あり、熱帶植物館も往々これに附屬し、日曜にはこゝにて奏樂あり、士民の少しく餘裕あるもの、大方此處に遊びて、樂み暮らす、市場は近時追々に大なる建物を建てたるが多かれど、それさへ用ゐず、大なる辻の市場に、或は傘、或は紙天などを張りて市をたつるが多かり、中には辻ならぬ街道にて、我國の如くするも少からず、寺院、美術館など皆木戸錢あり、但し何曜と定めて無料なる日を設くる

が多し、市役所も多くは由緒ある建物なり、取引所の莊麗なるも、大方の都會に見るべし、近世に至り、更に停車場の莊麗なるが、大方町の中央に出で来て、一家にたごへば玄關の役目をなし、その前なる廣庭には、市の尤も記念すべき人物の像など立つが多し。

序に娼婦は、都會には大概數多くこれありて、各自獨立營業の姿なり、居酒屋の高等なるもの、即ち珈琲店、道化、芝居の座、寄席、踊場などを出張の店とし、これに出づる能はざるものは、街道を店とす、妓樓といふが如きものもあれど、其數は多からず、こゝにては、全く牛馬同然の扱なり、嫖客は、中以上は珈琲店、以下は街道にて彼等を捕獲し、彼等に擒らる。ギョッチンゲンの如きは、流石に大學と兵營とを主とせる都會なれば、かゝる娼婦はなき様なり、總じて獨逸の兵營所在地には娼婦の必要なしといふ、こゝは下婢の類をもて供給の充分なるが爲なりとぞ、作法の觀念の

未だ發達せぬ社會のことなれば、夕暮よりは到る處の遊園、おひびきの場所と化すと知られたり、盆踊にあらぬ冬踊あり、冬踊は、我、刈上、時節より始まり、大凡、苗代、時節まで、ついで、貴賤上下のわかちなし、伯林にては二月八日に國王親臨の踊會あり、大方の家の座敷は、踊場となる様に床板を張る、わかき娘のある家にては、度々少尉、ドクトル連などを招きて踊を催す、既に婚姻せるものは、屢々踊らず、樂隊にて囃し立つる、調子我盆踊に似て陽氣なり、男は燕尾服とて、腰引のあらはなるを着、女は胸腕などを惜し氣もなく露はしつ、相抱きて鼠花火の如くめぐる様、何の所作もなきことながら、皆酔へるが如く、娛しむ様なり、斯く男女ともに極めて薄着なるを要するが故に、踊場には暖室の装置を施す、踊りに行くものは、途上小夜着の如きものを着て、室に入るときこれを脱く、明治の御代、禮服の制定まれる、皇后陛下には、憲法發布のをり、御風氣に犯され

玉へり、とぞ承りし、かしこし。

その三

七月廿日シエリインを見了りて、夕六時半リュウベックに向ふ。リュウベックは西の方二十里バルチック海頭にあり。其昔ハンサ同盟の牛耳を執りしが、今も丁抹瑞典の要路に當り、獨逸自由市の一として七萬の人口を擁し、繁盛の一都會なり。大方の都會には、市役所の穴藏に、市役所穴藏といふ料理屋あり。リュウベックのはその名高し。こは町役人等の食時の場として古より用ゐたる者、壁畫などに古くして観るべきもの多し。町の大部は中古の姿を止め、研究に資するもの少からず。此處もまた入江港なり。浚渫の勞想ふべし。廿一日午前十一時此處を辭し、西北廿一里キイルに向ふ。此間丘あり、林あり、大湖、小湖、其間に點綴して、北獨

逸、第一の名勝、ホルスタイン、瑞西を成す。十二時半着す。汽車中に道連となれるフレンスブルグの油商人と共に獨逸帝國海軍の根據地なる軍港を觀る。此處もまた入江港ながら、其幅ひろきは東西半里餘にして、曩のロストック、リュウベックに似ず。入江の長さは三里餘あり、小汽船ありて要塞砲兵營所フリードリヒスオルトまで往返す。有名なるキイル運河は、此營所の南より開鑿せり。キイルは人口八萬、駭々として般販を加ふ。大學あり、醫科のみは少しく有名なり。又我が國にも來遊ありし例のハインリヒ親王の邸宅あり。其海軍兵學校、兩三年來四十名の生徒定員を百二十名に増せり。夕六時、西南二十九里を二時間にて馳せ、漢堡に着す。今はアルトナ市と接して一となり、人口合せて九十萬、獨逸帝國の大阪と稱すべし。北海の頭、エルベ河畔の河港にて、昔ハンサ同盟の一、今も帝國の自由市たり。風俗も都會のみやびたり。すべて此邊は獨逸

語の尤も正しく麗はしき所といふ、メクレンブルグの田舎に行はるゝ平獨逸語とは大に趣を異にす。廿二日夕こゝを辭して西南二十九里、ブレエメンに向ふ。こゝは人口十四萬、北方自由市としては漢堡に次ぐ、エゼル河に沿へる河港なり、海口ブレエメルハアフェンまでは十五里許を距つ。

總じて北獨逸の自由市は、東海、バルチック、北海の商業によりて成れる者なれど、中世には寧ろバルチックを重要とし、近世に至り、大西洋印度洋、太平洋の航海次第に興るに及びては、漸次重心の北海に移れる者とおぼし、今漢堡は亞米利加線を以て、ブレエメンは北獨逸ロイドを以て、いづれも獨逸航海業の原點となり、世界の商海に覇を争ふの盛況を呈するに至れるなり、地中海、バルチック海は西洋航海業の練習所たりしが、今は大西洋、印度洋、終には太平洋をもて、檣舞臺とするの時代に達

せむとするものならし、徳川政策の眞價を分析的に吟味すると、識者の要事ならざらむや。

廿三日商港自由市の見物を了へて、東南廿五里ハンノオヴルに向ふ、着せる時正に正午なり、今日は日曜の寺參の果にや、はた遊山のいで立にや、ゲオルグ街頭絡驛として士女の行くに逢ふ、風俗優雅なれど、何となく人心の振はぬ様に見えたるも心がらにや、ケストナル博物館には我が狩野派の畫幅を多く蒐めたり、いかゞはしきもの多し、カント、ヘニゲル、ライブニツ等の自筆はゆかしき看物なり、此館を出づる折より雷雨すまじく、街道をたどるもゆゝしき程なり、かくて舊王城の後頭なる濠の畔に出づ、灰色の建物、住む人なしに、蕭條たる風物、秋ならでいと哀なり、ヘルレンホエザルアレエ(大家通り)を行きて、エルフェン城を看る、ロマチスク風の品よき建物、今は理工科大學校となりて、庭前に立て

る、いにしへのハンノオヴル國王エルネスト、アウグストスの騎馬像立
 てるも、昔の名残をさめたり、案ずるにハンノオヴル王家は今の英國
 王室の宗家にして、普魯西と拮抗すべき以上の家柄なり、曩にメクレム
 ブルグ、ストレリッツ大公家より、普魯西の名高きルイゼエ王后来り歸ぎ、
 而して其姉君はハンノオヴルの后たり、ルイゼエ王后の子は即維廉大
 帝にして、獨逸帝國をかためたり、其世子(後にフリードリヒ二世)の妃は
 即ち英國現女王の王女なり、これを獨逸今帝維廉二世の母后とす、され
 ば、ハンノオヴルと普魯西とは、骨肉の關係、殊には重縁の間柄なりしに、
 一八六六年の普墺戦争に、ハンノオヴル王國は、ヘッセン大公國、ナッサ
 ウ、選公國及自由市、フランクフルトと共に、墺に應じ、戰敗れて、遂に普
 に併せられ、國滅びて、ハンノオヴル王は、僅に英國の由縁により、其の國
 かムバルランド侯の稱を得て、今墺都に閉居せらるゝよし、されば先日

ドブランの中學校長がエルフェン黨に屬し、普魯西に嫌焉たりと聞き
 しも、これが爲なりきかゝる骨肉魚肉の禍も、主なる原因は、此國のいぶ
 せきまで、に大なりしにもあるべく、今その都會の規模を察るも、大國の
 都たりしさまは、顯然たり、霜を履みて、堅氷至る、南方の巴威里も亦危い
 かな。

一本の二枝さしつ、その枝の上枝咲かすと、下枝枯らしつ。

德川氏の興るや、織田豊臣の遺孤遂に安きを得ず、加藤池田福島の諸將
 或は其終焉を詳にせず、獨逸統一の大業は、十九世紀の一大生面ながら、
 そが幾許の犠牲を伴へるか、は詳に觀るを要すべく、殊に其政策の得失
 の如きは、盲仰猴似の外に察すべきものなるべし、とかくして停車場前
 に出づ、此處にもアウグストス王騎馬の像あり、すべて停車場は都會の
 玄關として、其前の廣庭は、頗る裝飾をこらす、が例なれど、亡國の國王と

て、昔は、敬仰のためなりけむを、今は中々に、僂辱の感あるぞ是非なき。
汽車西に馳すること二十一里、ブラウンシュワイヒ公國同名の首都に
達す、人口十二萬、恰もハンノオヴル府の半なり、三四百年前の人家に乏
しからず、獨の都會中尤も中世の面影をこゝむるをもてはやさる
ゝ所なり、細き町、低きゴチックの住家、幼稚なる美術の結晶ともいふべ
き寺など、趣あり、されど新らしき町々は閑靜優雅にして、土地柄いかに
も住みよげなり、夕暮九時、木蔭暗き、共同墓地に、近世の大文豪、レッシン
グの墓に詣つた、そがれ時の、それかど定かならねど、追懷の情には十分
なり、大數學家ガウスも此地に生れたりとて、其舊住宅の近傍に大なる
銅像たてり、理工科大學あり、此處も、エルフエン方の公家、今は斷絶し
て、普國の親王攝政となり、名のみ聯邦の一たり。
此夕ハレを經、大學其他を觀、學生の擊劍を見などしつ、薄暮にライプ

チヒに達す、行程五十六里、人口四十萬、ザクゼン王國第二の大都、觀るべ
きものも多ければ、此處に二泊す、操山大西君に、此地にて逢はむと心懸
來しに、健康常ならで、數日前歸朝の途に就けりといふに、驚きかつ惜む、
ライプチヒの大學は、邦人の卒業も少からざる所なれば、我國にもよ
く聞ひたり、獨逸書林の中心として有名なり、其グラッシン博物館なる民
族館は、配列尤も整へり、高等法院の建築は、三百萬圓以上を費し、千百萬
圓を費せりといへる、伯林なる帝國議會議事堂についで、の建物と誇
稱す、此地より東の方ザクゼン王國の首都ドレスデンに通ずる鐵道三
十里は、獨逸の整備せる鐵道の嚆矢たり、七月廿六日朝これによりてド
レスデンに入る。

ドレスデンは人口三十五萬、エルベ河の上流にあり、漢堡と遙に相應
ず、伯林を獨逸の東京とすれば、漢堡は大阪なり、ドレスデンを京都とす

べし、但しこの二府の距離は甚だ近からず、獨逸美術の中心と目せらるゝ所、其美術館は、前世紀にありて時のザクゼン王が擴張せるより俄に有名となり、就中ラファエルサンチオのマドンナは天下の逸品と稱せらる、其他繪畫彫刻に原物の尤なるものおほくなり、上りの伯林は遠く及びがたし、とは世の定評なり、これに伯仲の名譽を有するは獨逸聯邦中、唯、ミュンヘンあるのみ。

ドレスデンに來りて始めて山に近づき、エルベ川も稍三町に近き河幅を有すれど、流は頗る急になりて、我國の河流の趣を有す。此處より此川に沿ひて南すること十七里にして、獨逸兩帝國の國境なるポオデンバッハに達す。此邊は一躰にザクゼン瑞西と稱へて、風光の明媚をもて著るし。歐洲にては瑞西をもて景色の第一とするが故に、何々瑞西といふは、なほ我何々八景などいふがごとし。エルベ川の兩岸、直に巉巖の聳

立、す、る、わ、り、キ、エ、ニ、ヒ、ス、タ、イ、ン、の、古、城、塞、同、名、の、山、上、に、峙、ち、て、眼、下、に、エ、ル、ベ、を、瞰、め、こ、れ、に、對、し、て、リ、エ、ン、ス、タ、イ、ン、の、第、一、峰、七、年、戰、争、の、古、戰、跡、を、留、り、て、崢、嶸、峯、岸、の、雄、態、を、現、し、森、深、く、谿、暗、く、昨、日、ま、で、の、所、見、と、は、全、く、別、天、地、に、入、れ、り、ポ、オ、デ、ン、バ、ッ、ハ、に、て、税、關、の、檢、査、あ、り、更、に、乗、換、へ、て、ポ、ヘ、ミ、ア、の、域、内、を、進、み、南、東、三、十、三、里、に、し、て、其、首、都、ブ、ラ、ア、グ、に、達、す。

獨逸國に入りても、獨逸語は一般の國語なれど、獨逸語のみの行はるゝは、獨逸國本部に限り、既にこのポヘミアにも、チェヒッシ語は土語として尤も廣く通用す、されば公用には、獨逸語即用ゐることながら、近時獨逸の權勢衰ふるまいに、土語の範域は益々ひろまる。ブラアグは人口三十六萬、其六分五はチェヒッシ人にて六分一は獨逸人なり、されば大學も獨逸大學(學生千三百人)及チェヒッシ大學(學生二千八百人)

の二あり、理工科大學校も同様に二つありて對立す。宗旨は奥匈國おしなべて羅馬舊教を多しとす。人氣獨逸に比すれば寛漫なり。この市はモルダウ河を擁して建つ。橋錢を徴する橋も二つ三つあり、わたりて西すれば舊王城及城寨あり、風光雄渾なり。こゝに奥國第八軍團の軍團司令部あり、兵隊の姿、獨逸より入りては、頓に情容あるを覺ゆ。

農業の發達をもて著るき奥の中原、丘巒大濤の如き間を南に馳すること九十里にして、奥太利匈牙利國家聯合の中、奥太利帝國の首都維也納に達す。時に七月二十八日夜七時半、かねて通じおけるまゝに、迎へられて佐藤岡村二君の宿所に投ず、久しぶりの會晤とて、旅の中の興會かぎりなし。

その四

維也納はドナウの大江に臨み、人口はわが東京と伯仲して、歐陸第三の大都たり。マリァテレジア女皇を以て極盛に達し、今世紀に入りては、はかばかしからぬ國勢とはいへど、流石に門閥ある國の姿は、人の風俗、美術工藝の趣味などの上にあらはれたり。十一世紀の末、我國にては法性寺入道や酒顛童子が全盛を極めしころ、ドナウの右岸彈丸黒子の地になり出でけるが初めに、百年が間に例の城郭をめぐらせる町となれるなり。郭の内を内町といひ、外を外町といふ。廓の周圍僅に一里、三十年前、こゝもまたこの城郭を取り壊して莊麗なる散歩道とせり。道幅三十間より五十間許、環の如く内町をめぐれるが故に名つけて環たまきリンググといふ。就中宮庭環ホオフリング樂劇環オペルンリングなどを尤も名所とす。宮庭環の内町の方に帝闕あり、もとより通り、拔勝手なり、それに對ひて外町の方には大なる博物館二棟むかひて立てり、右なるは自

然史博物館とて、自然科學界を進化論の次第に隨ひて配列す、礦物、地質、古生物、生物、民族といふ順序なり、左なるは美術史博物館にて、所謂文明といふものゝ諸方面を示すものなり、繪畫、彫刻、美術、工藝的製品を陳列す、およそ博物館の大規模にして、またよく整頓せるは、わが見たる所にては、此處のを第一とす、これを總稱して、皇室博物館といふ、建物も復興式の高尙、優雅なり、兩館の間四町歩許の庭あり、中央にマリアテレジア女皇の銅像建つ、廣濶清楚、高尙なる趣味を現して、まことに歐洲に在るを覺ゆしむ、帝闕の左右に宮苑及民苑あり、民苑は常に庶民の遊覽する場處とす、環の東端に近きところに市園あり、この市園環、及民苑をもて維也納の尤も美しくしき遊園とす、暮春の候、菩提樹の嫩葉のやゝ翠なる頃、時服既に成り、玉鞍漸く輕きに及びては、滿城の才子佳人、優遊緩歩、流盼低語、競うて、所謂、示衣運動を試む、といふは、即ち此處、それか、あらぬか、

木の葉さへ枯れむとする、今年の夏のきびしさに、錦衣の麗人、銀鞭の佳公子の此處に、彼處に、浮世の花を咲かすも、少からず見ゆ。

外町の東北部に、ブラアターとて大なる林の園ありて、そが一區に淺草奥山ともいひつべき遊び場、エチチアといふ、大車坂おとし、道化芝居など遊びの道具數あるうちに、コリアンドリといふがあり、並樹の枝々に、秋の實のこどく、電燈を照せる、下道を知るも知らぬも、男も女も大人も子供も、逢ふ人毎に、赤き青き五色の紙片を、花ひらのごと、投げ撲つわざなり、あまたの賣手ありて、此あたりには、此紙片を鬻ぐ、値一袋二十錢、人々これを手にして、仲間に入る、連中は書生あり、軍人あり、商人あり、奥様あり、令嬢あり、辻君あり、夜九時頃より始まりて、一時半ばかりつゞく、大方水曜及日曜に之を催すなり。

こゝの樂劇は中歐第一と稱す、恰も八月一日に夏興行はじまり、その

夜はフアウスト曲中マルガレエテを演ずるよし新聞に見えれば、其夜見物す。かくて一週日の間、日毎に大體の巡覽に力め、やゝ果てたれば、八月三日の朝を以て一まづ匈牙利にむけ出發することと決む。抑々奥國の今帝は寛厚溫柔の長者、而も御年漸く高く、去年即位五十年紀念式の舉行あらむとせるをりもこそあれ、帝が生涯の伴侶たり花たり明星たらせらるゝ皇后には、ゆくりなくも一朝無政府黨の兇刃に罹らせたまふ。こは去秋九月十二日、吾が始めて伯林に入りし翌日の事にて、皆人の記憶に在り、さなきだに數年前皇太子の凶賊の手に罹らせられし、事の本末今もなほ雲霧の裏に在るに、今またかゝる災さへおこりては、フランツヨゼフ第二世も、近ころ頗る政事に倦ませられたるの御様なり。ハプスブルク家の九鼎も、頗る晩期に瀕せりなど、口さかなき童謠のつたふる所なるに、新興の匈牙利との關係は、尤も重大とせらるゝ所、一昨

年暮の議會にも大破裂を見たるほどなれば、心ある此國の人士は、よりに眉をひそむるもありと、かきこえし。

八月三日朝七時發船、ドナウの長江を下の方、匈牙利の首府ブダペストに向ふ、水程七十里、維也納より約二十里にして、ブレッズブルグの嶮要あり、山迫り、水勢盛まりてまた開く、これ奥太利と匈牙利との境とす。漸く匈の地境に入りては、いにしへのコモラン、グランの市街も見え、大マロスの古城趾も仰がる。すべて、此邊の地域、遠くは土耳其人の蹂躪の迹、近くは一八四八及九年の戰塵の迹とて、山勢水光すべて趣味に富み、げなり、江上の夕風肌涼しきに、彩雲映る水の色、細波ながらに滔々として流れて住まらざる、誰にかも千古の浮沈を語りむとする。歐洲第一の此大河も、治水の術の進めるがためにや、川幅は四五町を超ゆること罕なり、航行の汽船は、大さ安進丸の二倍よりは小なるべし、食堂もあり寢

室もありていと便利なり。夕八時ブダベストに着す。

匈牙利は全國の人口千七百餘萬、埃太利と殆ど相若く、就中九百萬は、蒙古人種なるマジアル人、むかし漢武に斥攘せられたる匈奴に關係ありといふ。ブダベストはもとドナウ河を挾める二つの都會なりしが、近時合して一となり、匈牙利王國の首府となり、人口六十萬を有し、活潑繁榮なる中歐の一大都會となれり。ドナウの右岸、西に當りて、王城軍營師範學校等あり、これをブダとす。東左岸は主として商業の都會にて、千三百萬圓を費せる維也納の市役所に對して、千百萬圓を費せる國會議事堂、大學、博物館をはじめ、莊大なる建築に乏しからず、これをベストとす。ドナウ河上四個の大鐵橋石橋を架して、兩部を連結し、又無數の小蒸氣船ありて、此間を上下す。川上にマルガレエテ島あり、長二十町、幅五町にいたる。十二世紀の舊寺觀の頽廢あり、樹木鬱蒼、秋草蕭楚、温泉の湧出あり、瀧をなし、池をなす、以て都人遊觀の處とす。此國大侯の一人ヨゼフ侯の私有なるを、さる英人の譲り受けを申込みしも、拒みて與へざりしといふ。

中歐に於ける唯一の高加索人以外の國として、この國の風俗も頗る目立つものあり、殊に婦人の服裝は通常の歐風と太く異れり。言語はウラルアルタイ語脈に屬して、我國語にも似かよひたる所あり。市街の様は全く中歐の他の都會と變りなし。宗教は一般に羅馬正教を奉じ、文章は百年前までは羅甸文を用ゐしが、爾來は全く羅馬字にてつゝれる。匈牙利語即ちマジアル語をもて公私一切の用に供す。埃帝國は匈牙利國と國家聯合をつくり、フランツヨゼフ二世は埃帝たると同時に匈牙利王たり、外交及軍制を共にし、其財源は埃七分、匈牙利三分の率にて釀出することながら、近時は啖離分立の勢益、甚だし、匈の公文は官より別に獨逸語に譯せ

るもの一部を發刊するのみ、一般人士の獨逸語に通ずること少く、又これを厭うてなるべく自國語をもて應接せむとする様なり。

四日數所の見物の後に、市の東北端なる廣大なるワロスゲト町町の小森森といふ公園に至る。品よき一士人追ひ來りて、農産博物館を見むとおぼさずやと問ふ。見まほしけれと今は閉館と揭示しあるを如何にせむといへば、否、喜びて案内仕らむといひつゝ、いざとて其が官舎に誘へり。名乗あへば、こは此館の副長にてバイケルト、アラヨオス、若といふ人なり。西洋諸國の名を先にし苗字を後にするに似ずして、我國の如く姓名の順に唱ふるが先づ珍らし、我父の名もかくいふが故に、若若といふ語を加へたるなりなど、物語いと親し。此農産博物館は、一昨々一八九六年、此國建國の千年祝典の世界大博覽會の一部なれど、假普請なるをもて、不日市役所へ移轉し、こを取毀さむとするが爲に、今は公衆には閉ちた

るなりといふ。田産、水産、林産等、工藝の見本に統計に、いづれも全備せり。最後に茶業及蠶業の部門に至れば、我國よりの出品も相應にあり。就中養蠶は特に人形をつくり仕事の雛形を示せるが、よく調ひて遺憾なし。織物などの西洋の眼に目立つべきものなきは、口惜し。説明のため處々に歐洲の地圖を掲げたるが、何と埃とは全く別色に彩り、バイケルト君は、一々これ見たまへと指示す。味ふべし、しきりに貴國人と我等とは親類の間柄なりなどいふ。吾も我學校にては支那の大史家司馬遷の史記によりて、貴國の史前史を讀むこと普通なりなど語る。見物果て、更に其室に誘はれ、此國の産業に關する書類を贈らる。明日は文部省を訪はまく欲すといへば、次官に紹介すべしと書狀を認め呉る。すべて國をもておのがものと愛で尊ぶ心操見えてゆかし。

五日朝役所の時刻の前に、考古博物館を見、理工科大學校を見る。學生

グウドラ、ペラといふ人に逢ふ、工藝博物館はいつこと問へば、直に先立ちて案内し、却りて大に喜べる色あり、遂に吾がゆくまゝに市有共同墓地をも案内す、有名なる興國の名士コッスウト、ラヨス、一八四八國難のをりの第一内閣總理伯爵バッチア、アニ、ラヨス、デアク、フェレンツ、名將クラブカ、ギヨルギ、陸軍卿エッタ、アンタル、詩聖アラニア、ヤノス等諸豪傑の墓に詣づ、此人もしばく民族血縁のことをいひ、他年成業の後は貴國に遊ばむとおもふなごいふ。

いにしへの、單于が國を、吾訪へば、うかち訪ひ來と、人たゝ

ふなり

此學生と慕參中わが墓癖をかたりて、ブラウン、シ、ワ、イ、ヒ、に、て、も、レ、ッ、シ、ン、グ、の、墓、に、詣、で、た、り、と、い、へ、ば、さ、れ、ど、レ、ッ、シ、ン、グ、は、獵、逸、人、な、ら、ず、や、と、い、ふ、

文部省も事いと早速なり、次官ジイリウスキイ君は一兩日前旅行せりとして、高等視學官エロエチ、ペラ君及參事官等二三の人々に面し、種々質問して頗る要領を得たり、今は夏休中なれど、校舎設備は喜びて御目にかけてむといふ、午後三時を約して本省を辭す、定刻にエロエチ君の寓を訪ふ、此人日本語を少く覺えたりとして、比較言語學に關する談話もあり、話の間に時々「暑い」といふ、この日の盛暑、實に攝氏三十五度に及ぶ、かくてその案内によりてギムナジウム及實科中學各一を見る、この國の高等視學官は老功のギムナジウム校長より選任し、匈國全体を十二中學區四十八小學區に分ち、各中學區には一人の高等視學官、小學區には普通視學官あり、文部省と各校との間に立ちてこれを管視す、エロエチ君は其第一中學區の高等視學官にして、首都ブダペスト及其近郊を包含す、此區を更に十小區に分ち、少くとも一小區に中學及實科中學

各一を建つる計畫にて、此三年後には完成に至る見込なりといふ。又女子の大學入學問題は、弊邦歐洲に率先して之を解決し、三年前既に女子ギムナジウムを設立し、其卒業者は随意に大學中文理科及醫科に入るを許すこと、せりと極めて熱心に自國の經營を説明す。およそこの國が熱心銳意國運の進歩に力ひる様は、種種の事物に徴して知られたり。ア、ンドレ、アス街なる地下電氣鐵道も、一昨々年の築造にかゝり、實に世界に於けるその嚆矢なりとぞ。一體の人氣もふるひおこりて活潑なり。今は奥に對せる外的問題あるのみ、國內は無事なり、種々人種のちがひはあれど、これよりおこる格別の紛争は大ならず、唯この國の短所は、水にドナウの長江あるも、海岸は唯アドリアチック海濱にフィウメの一港あるのみなれば、航海業は望少なしとて、バイケルト君は歎息す。されどこれだに海軍機關學上には有名の所にて、我國よりも海軍技術官の

駐在あるところなり。總して歐洲各國の匈牙利を見るは、何となく人種の差よりの惡感情あるやうなり。獨逸人は殊に風俗淫猥なり、巧言令色なり、など酷評す。奥太利の文部の官吏も、匈牙利にてはさぞや言語に困りたまひしならむといふ。否、獨逸語にて自由に通しきといへば訝れる様なりき。

五日夕直行列車にて維也納にかへる。四時間にして達す。翌日よりは文部交渉をはじむ。普魯西のごとく、學校見分は公使館外務省を経て出願の上、文部の特許を要すとの事なり。匈の如く簡易にあらねど、普のごとく拒絶の意味は少きに似たり。十日人々と市の水道下水を見る。これも市の特待にて、技師長の案内なり。大工事ながらよく整へり。物價は獨逸の田舎尤も廉く、伯林はやゝ高く、維也納は更に高く、ブダペストは更に不廉なり。風俗は維也納尤も優美に、伯林、バダペスト、いそ

が、し、く、兵、隊、は、獨、逸、嚴、肅、に、プ、ラ、ア、グ、眠、り、維、也、納、倦、み、ブ、ダ、ベ、ス、ト、は、ま、た、
 頗、る、活、潑、な、り、乞、食、は、獨、逸、殆、ど、絶、無、プ、ラ、ア、グ、い、と、多、く、維、也、納、少、く、ブ、ダ、
 ベ、ス、ト、い、よ、く、少、し、道、路、は、伯、林、と、ブ、ダ、ベ、ス、ト、と、尤、も、清、ら、か、な、り、寺、觀、
 は、伯、林、に、觀、る、べ、き、も、の、な、く、北、獨、逸、の、町、々、は、早、ゴ、チ、ツ、ク、風、に、し、て、莊、嚴、
 な、り、ブ、ラ、ア、グ、は、内、部、の、燦、爛、た、る、が、多、く、維、也、納、は、ス、ラ、フ、ア、ン、寺、の、み、莊、
 嚴、な、り、ブ、ダ、ベ、ス、ト、觀、る、べ、き、も、の、な、し、す、べ、て、寺、に、偶、像、多、き、と、墓、地、の、莊、
 嚴、な、る、と、は、案、外、な、り、我、が、佛、寺、も、歐、洲、の、寺、に、比、ひ、て、は、猶、淡、泊、と、い、は、ざ、
 る、を、得、ず、位、牌、の、破、壞、墓、地、の、荒、蕪、な、ど、は、酷、薄、に、し、て、猜、智、多、き、宣、教、師、の、
 術、策、な、り、と、曉、る、べ、し、。

その五

八月十一日朝維也納を辭して南獨逸の巴威里に向ふ最近の路を取

り、午後四時シムバッハにて埃太利より再び獨逸に入る。維也納よりミ
 ユンヘンまで百八里、途上處々雞犬の郷を過り、車行十二時間にして夜
 八時着す。在留の諸友停車場に迎ふ。滞在一週日、各種の觀覽にて餘暇な
 し。ハン、ホ、オ、プ、ル、王、國、滅、び、て、よ、り、巴、威、里、は、獨、逸、聯、邦、中、普、魯、西、に、次、ぐ、大、
 國、な、り、地、勢、遠、く、南、に、入、り、歐、洲、の、脊、梁、た、る、ア、ル、ペ、ン、山、下、に、達、す、民、の、奉、
 ず、る、所、亦、殆、ど、全、く、羅、馬、舊、教、に、し、て、人、情、す、べ、て、北、獨、逸、と、同、じ、か、ら、ず、寧、
 ろ、宗、旨、を、同、し、う、す、る、鄰、國、埃、太、利、に、似、た、る、節、の、見、ゆ、獨、逸、美、術、の、中、心、と、
 して、は、ザ、ク、ゼ、ン、王、國、の、ド、レ、ス、デ、ン、と、肩、を、比、べ、て、遠、く、伯、林、に、駕、し、全、世、
 界、麥、酒、の、中、心、と、し、て、は、殊、に、其、名、を、知、ら、る、空、を、摩、す、る、煙、筒、は、悉、く、麥、酒、
 釀、造、所、に、し、て、鐵、路、を、馳、す、る、荷、車、の、半、は、是、れ、麥、酒、車、な、り、と、い、ふ、さ、れば、
 此、國、の、諺、に、も、ミ、ユ、ン、ヘ、ン、の、風、俗、三、歲、の、小、兒、も、乳、汁、を、飲、ま、ず、し、て、麥、酒、
 を、飲、む、と、い、ふ、程、な、り、王、室、釀、造、所、と、い、ふ、あ、り、庶、民、の、群、が、る、も、の、朝、夕、場、

に滿つ、其至廉なるがためなり。價我國に比して殆ど三分の一、但し此地の料理屋にては三割高く、伯林にては二倍餘、巴里にては四倍乃至其以上なり。

ミュンヘンは人口四十二萬、巴威里王國の中央政府あり、文部省も市役所も、應對至りて簡單にして懇切なり、文部省は今普請中とて、廊下に添へる暗き室にて執務す、こゝにては勅參ライヘンステルン君、市役所にては學務課長スタイテル君、主として便宜を與へらる。大學あり、歐陸にて第二、獨逸にては第一の大圖書館を有す、藏書百七十萬卷といふ。王宮の結構莊麗、例の木戸錢とりて見物を許す、寢殿さへ説明いと詳に見物せしむ。西郊のニムフエンベルグ離宮、園池の清雅幽逸なる、維也納のシヨエンブルン離宮(甘泉殿と譯すべし)と同類にして異等といひつべし。

八月十五日午後スタルンベルグ湖に遊ぶ、湖はミュンヘン府の南西八里に在り、汽車湖畔に着し、直に遊覽汽船に搭じて周遊す、湖水巾半里乃至一里九町、長さ南北五里、岸頭丘巒起伏、人家樅林の間に點綴し、南面一帶アルペン連峰、翠碧湖光に映じ、景致いふべからず。水面海拔千六百尺、連峰の最も高きは約一萬尺とす、舟行半時程、シロオスベルグ(城山)に達す、小やかなる離宮あり、唯常人の田舎住居に似たり、これを先王ルウドキヒ二世閉居の所とす、普魯西の興りて獨逸統一の勢漸く成るや、一八六六年普墺戰爭あり、巴威里の去就久しく決せず、普佛戰爭起るに及びて、一八七一年一月、勝に乗りたる獨逸勢、佛のエルサイユ宮に普魯西王維廉第一世の獨逸皇帝即位の式を擧ぐる、その發聲者は實に巴威里王なりしかど、戰勝の虚榮は夢の如く消えて、普魯西の勢のみ日々、隆なり、ルウドキヒ二世意平なること、能はず、爵々として疾を成し、

發してキム湖畔の大土木となる普の君相術を用ひて巴の宗室を問
 疎す王は精神病者として此地に幽せられ王叔ルイトボルドを攝政と
 し季弟オットを王位に眞く反對の議を主張せるもの宗室唯王叔アル
 フォンヌ一人あるのみ居ること幾もなく一夜王離宮を出で湖水に投
 じて崩す侍醫某亦相ついで投す實に一八八六年六月十三日なり去年
 國人祠を淵のほとりなる林中に建て王の靈を祀る蒼々たる水色偏に
 暗愁の長なるを看るさるにても此丘上更にピスマルク塔の雲を衝い
 て起れるはげに籠罩縦横刺刃を渡るに似たる老雄の本色東西古今そ
 の轍を同うすともいはましや徳川興隆史の傍には毎に大阪落城史あ
 るぞかし。

アルペンの峰ゆ吹きおろす風をあらみ波立ちさわぐひ
 よごりの湖

舟行三時麥酒あり湖の産する鱸あり感興悠々たり夕されば風涼しく
 淡月アルペン山上に出で湖光山色を涵して乾坤寥廓の感なきにあら
 ず夜九時ミュンヘンに歸りぬ。

八月十八日朝ミュンヘンを辭してよりはまた忙はしき旅に進みぬ
 西の方十里古色あるアウグスブルグを觀(人口八萬)ウルムを過りて遙
 に寺院の高塔を望む此處ドナウとライン黒海と北海との分水界にし
 てこれを登りて出づる所は有名なるシワルツワルド(黒林)の岡巒地方
 なり其中樞を瓦敦堡王國の首府ストゥットガルトとすアウグスブル
 クより四十三里人口十五萬莊麗にして整頓せる工藝博物館あり廣大
 にして幽雅なる宮苑の公園あり立派なる王宮もあれを國王には小や
 かなる控邸に住せらる十九日正午こゝを立ち出でバアデンバアデン
 に赴く南西四十三里バアデン大公國の域内に入り山間一萬五千の小

舊都、有名なる温泉場として、遠く羅馬時代より世に知らる、所謂黄金水の町即ちこれ、古城の頽趾あり、これ亦第三世紀よりのものなりしが、今より二百年前、佛王路易十四世の攻略にあひて毀壞せらる、アルサスロレンもそのをり佛に併せられしを、近時の普佛戦争にて獨逸方へ回復せられたるなり、古城頭の登臨、雄風心を洗うて胸宇豁然たり、靈泉に浴し、夜九時過、瀛車南の方フライブルグに向ふ、電馳二十八里、十三夜の明月、東山の上に懸り、鐵車の夜風漸く秋の進めるを覺ゆ、此地獨逸の西南境を距ること僅に十里、古の城山あり、斷礎の尋ぬべきなし、山近く、溪流白し、莊麗なる寺觀あり、大學あり。

フライブルグを北西に距ること二十六里、始めてラインの上流をわたり、今は獨逸帝國の一縣エルザス州の首府にして亦要地なるストラスブルグに達す、人口十四萬、商業繁榮の都會なり、其寺觀は尤も名あ

り、其大學は聞えたり、詩聖ギョエテ亦曾て此に學生たり、街中其寓家を見る、印刷術の發明者グウテンベルグも亦この地の人なりといふ、尤も心を驚かすものは、此全市を包圍せる防禦城塞なり、城濠の架橋また多く、刎橋なり、ことし海牙なる平和會議の失敗もまことに當然と感じぬ、夜七時半北行四十二里、ルウテルが教法改革のをり召集せられし、獨逸帝國議會をもて不朽なる小都ヨルムス(人口三萬)に宿す。

ヨルムスより復たびラインを渡り、東行十八里にして、二十一日正午、風景畫けるが如き、ハイデルベルグ(人口三萬五千)に達す、ツッカル河、幅百間に満たす、東より西に流れ、兩岸山相迫る處、纒に市街を成す、西はライン、河畔の平野、一望廣濶、東は即ちツッカルの谿にて、僅に鳥道を通ず、古城の今猶大方遺れるに、懷古博物館あり、建築古物ともに觀るべし、山上森林よく繁り、全山をもて一大遊園を成す、一里にして絶頂に達す、も

の見臺あり、眺望雄大、霸氣汪渤たり、夕暮に山を下り、夜三更、キユルツプ
 ルグに向うて發す、瀛車チツカルの谿を上り行く時に陰曆七月十五夜
 に、屬し、月色清涼、山靄淡々として夢の如く、隧道數十乍にして川に離れ
 乍にして川に沿ふ、その離るゝや悦乎として失ふ所あるが如く、その合
 ふや、遠別の人に接するに似たり、山影を涵し、水月を映す、まことに身は
 神仙寰中の人かと訝る、此行自然の詩趣實に此夜の月明をもて第一と
 す。

行くこと十餘里、チツカルエルツにて本意なくもチツカルに別れぬ
 山漸く平凡となり、月光は依然として好からぬにあらねど、亦唯尋常の
 月光となり、既にして夜更け、冷肌に迫り、キユルツブルグに達せる時既
 に一時、この夜行程四十里、此地復たび巴威里の域内なり、人口五萬の都
 邑、マイン川を擁して古城寨あり、大學あり、廿二日正午此處を辭してニ

ユウルンベルグに入る、巴威里第二の大都會にて、十七萬の人口を有す、
 その有名なるは、中世以來の城壁城門をそのまゝに保全せると、獨逸第
 一のゲルマニア古物學博物館あると、獨逸第一の畫伯アルブレヒトデ
 ユウレルの産地なることによる、チユウレルの住宅、今猶その展覽會をか
 ねて丁寧に保存せらる、その他には城門の一に刑事博物館あり、有名な
 る「鐵少女」をはじめ、慘烈なる拷問器械のかすく、一見人をして悚然た
 らしむ、これらすべて、今より八十年前まで用ゐたりといへば、歐洲文明
 の、ましまでに古からぬを想ふべし。

八月二十三日正午ニユウルンベルグを辭して北に馳す、巴威里の域
 を出で、は、風光の明媚と劇詩の舊迹とをもて名高き、チユウリングゲル
 森林と概稱する山嶺層疊の中を過ぎ行くこと六十里にして、イエナに
 達す、イエナの東南十里、地勢わが關ヶ原に似たる、シワルツカは、即ち一

八〇六年十月十日有名なるイエナ戦争の古戦場にして、普魯西の王弟ルイスフェルデナンドが戦歿せる所時にイエナの哲學教授たりしフイヒテが大學の講壇より挺身して戎軒に投せしといふもこの折のことなり山靜にして野鳥低く、行客をして坐に當年を低回せしむイエナはワイマアル大公國の域内にしてザアレ河を擁し人口一萬六千の小都邑ながら哲人フイヒテ及詩聖シルレルを教授に有せしをもて有名なる大學あり夜十時こゝを辭して大公國の首都ワイマアルに向ふイエナの西方僅に六里大斜面形の地勢なせる大野の中樞を占む三萬に足らぬ小都なれどギョエテシルレルヘルデルキイランドをもてその名不朽なり四文豪の住宅今尙存し殊にギョエテシルレルの住家はよく保存せらる質素なる文机古風の低き天井小さき窓などを見れば後生をいて愧ぢしむべくその臨終の寢臺を見ては坐に當日をおもひやり

て還りて偉人永遠の生活に想ひ到るべし兩詩聖の棺槨はワイマアル大公家の廟所に國葬せらるギョエテのは金の花輪をもてシルレルのは銀のをもて飾れりみな各地よりの寄進なりこの十九日にはフランクフルトにて廿八日には此地にてギョエテ祭あるべかりしを得あはずてけり。

午後二時僅にこゝを辭して西北ギョラチンゲンに向ふエルフルト、アイゼナッハ等の勝地あれど見ず五十二里の間を乗つぎなごして夕八時に着く志田吉江三宅の三君出で迎へつ直に東山ロオンスに赴く地勢雄大にして秋夕兵氣の肅々を懐ふあるが如しピスマルクは一八三一年より二年間此地の大学生たりしてその下宿屋ありそは土手と堀との間に唯一間を貸す小さき家なりまた大學の禁足場ありピスマルク時々此處に入牢を命せられたりとして小刀もおのが名をらく

書せるがのこれり。此地はもとハンノオブルの域内なりしを、一八六六年その滅亡のをり、普魯西に併せられたり。この地の考古博物館にその折の普魯西國王維廉より新附の都市に下せる御教書あり。讀みもてゆけば、書經にしばしば見ゆる湯武の受命放伐の申譯をおもひいづ。かくて月沈原にあること十三日、九月六日夕、東西四十八里マグデブルグに赴く、小學物理書にも見ゆるマグデブルグの半球を發明せるオットオ、フオン、ゲエリッケは此處の人なり。今は二十二萬の人口を有して、砂糖その他の大工業地なり。七日二十里東に行きてブランデンブルグを見る、普魯西基本の地たる同名の州の首都たりしことある所ながら、何となく寥落の狀ある四萬の小都會なり。學習院あれど、たゞ昔の名残と見えたり。これより東十里にしてポツダムあり。

その六

ポツダムは伯林の南六里に在り、巴里のエルサイユといふが如く、普魯西王家の離宮の地にして、また政治上の要地たり。町の宮、莫愁宮、新宮等の宮殿あり、また莫愁園といへるいと廣らかなる宮苑あり。宮苑はやがて公園にして、宮殿は例の木戸錢とりて内外人を問はず縦覽せしむ。その他山莊寺觀等中々にみやびたり。町の宮の門邊、街道の真中に王の木といふあり、菩提樹の老木にて、昔フリードリヒ大王、この木の下にて民の訟をなにくれとなく聽かせられたり。さてこの名あり、莫愁宮の由緒こそわけてめでたかりけれ。大王離宮を營まれたるに、宮の西南に風車臺あり、宮城よりの眺めに、いかにも目さはりなれば、王あるこの農翁に取拂を命せらる。翁、この風車の翁が爲に唯一の財産なること、たとへ

ば陛下の爲に普魯西の全版圖あるがごとし、今もし陛下の普魯西を奪はむとするものあらむに、甘んじてそがせむまゝに任せたまはむやと、憚りげもなく申しければ、王は言下に悟りていしくも聞えつるかな。翁の名は何とかいふと仰せけるに、獨身ののんきななる性分を、里人綽名してのんき爺(莫愁翁)サン、スウシイ、佛蘭西語なり、當時一般に上品として行はれたりと申すと聞え上ぐれば、いでわが城も今より翁の名をとりて莫愁宮と名づくべしと仰あり、これをこの宮この苑の由緒なると聞えたりまことや、國の將に起らむとする必ず禎祥あり、大王祁山の下に居り、積徳累世以て周室を致し、新田氏孤忠を以て時利あらず、その末終に大に起るものを徳川氏となす、普魯西今日の帝業キルヘルム、ピスマルク、モルトケ、君相將の世にも罕なる知遇によるといふも抑、亦一日のわざならめや、は、フリードリヒ大王の後、數十年にして那坡崙の厄あり、

普は北歐露西亞境なるチルシットに追ひつめられ、一八〇七年ルイイゼエ王後の歎願にも拘らず、剛愎なる那坡崙は普を要して不名譽至極なるチルシットの條約を結ばしむ、王后婦徳君徳と共に高く、勤儉尙武にして、民と親しみ、ホオヘンツォルレン家固有の美風を發揮して、盛徳逸事いひつくしがたかるを、時利あらず、國勢盛まり、今は如何ともすべからず、されば唯一の希望と光明とは偏に二王子の教育に繋るを確信して、熱心にいそしみたまひしが、天壽さへ長からで、一八一〇年七月十九日をもて、竟に永遠の眠に就かせたまひぬ、御年僅に三十五とぞ聞えし、烏兔匆匆六十年世の浮きふしの定めなく、當年十二歳の頑是なき御母后の牀前に泣き伏したまひし第二の皇子キルヘルム、今は髯髮既に白く、凜然たる威風、隱然中欧強國の君主たる天運を負うて、一八七〇年七月十九日、伯林の西郊シヤアロツテンブルグの廟所眠れるが如き御母

後のやさしき大理石寐像の傍に、こたび佛國との戦争にこそ、在天の神
 靈を慰めまつらむ時は來にけれと、首途の告辭に詣でらる積徳の注ぐ
 所、積威の發する所向ふ所敵なく、メッツとなりセダンとなりストラス
 ブルグとなり、而して巴里、エルサイユとなり、當年の屈辱全く雪ぎて、更
 に獨逸一統の業を成す莫愁一基の風車臺まことに今日を豫言するも
 のに似たりさればわが旅もよき獲麟を得つるかないでや伯林に入り
 て、優しき女神像をも拜まなむと、興亡治亂の迹をそこはかたなくおも
 ひつゝ、いくるに暮れがたき北地の初秋の日影いつしかに傾きて、莫愁園
 の菩提樹林も人影絶えたるに、さはとて伯林への路をたどりぬ。
 九月七日夜八時半、小供等の歡呼に迎へられてモアビイトなるドク
 トルグロオトの家に入り

後の中歐めぐり

獨逸帝國の域内は頗る既にめぐり見たれど、猶殘れるは東普魯西と
 ライン地方となり、東普魯西は更に他日の折をも待たむ、ライン地方は、
 佛國へ赴かむ折聊かの迂路を取りてまはり行かむを得策とすべし、中
 央逸逸に近く、古の獨逸帝國の興隆に興りてそが中心點となれりしハ
 ルツ地方あり、そも未だ見ねば、こたびはこの古獨逸およびラインの新
 獨逸を経て佛國に行かむと決めつ、道連としては渡邊君あり、共に期日
 を十九日と約しつ。

一年住みたる伯林の地には流石に交れる人々もありて、十二日の間
 大方訪問來往に忙しかりしを、漸くに事果て、ドクトル、グロオトの家と

も別を告げつ、九月十九日朝八時、伯林を辭して渡邊君もろとも途に上る。君のまだ見ずといふまゝに、まづマグデブルグに赴く。午前十一時より五時間にして見物果て、三十里許を汽車幾たびか乗換へて、夕七時エルニグロオデに着す。既にハルツの山峽なりす。このあたりの鐵道は、汽車の乗換しきりなり。さるは邊僻の土地、通路の大道ならぬがためと知られたり。いにしへホオヘンスタウフェン家の獨逸帝國に君臨せし頃は北獨逸の平原にこの山の屹然として雄視せるが如くに、このあたりすべて國の界區にてありけむを、今はたかゝる様も滄桑の變なり。此ころは唯ハルツ山中の溪流森林をめぐる人の避暑として遊ぶのみ、古帝王の遺蹟をたづぬる人さへぞいと罕なる。

エルニグロオデは人口一萬、山間の小邑ながら、ギムナジウム(中學)あり。廿日午前九時こゝを發して山中に入る。山を攀つる輕便鐵道あり。さ

れを我箱根に於ける傾斜に過ぎざれば、アプト式にはあらず。二里餘にしてスタイテルチレンチに達す。谿流山樹わが出湯に似たり。更に上ること六里、路はすべて九十九折にて、遂にハルツ山中の最高峰なるプロッケンに達す。山上風勁く、雲霧飛びて、遠望に便ならず。海拔僅に三千五百尺、これを北獨逸最高の山とすといへば、全般の地勢想ひ見るべし。ふたゞび鐵道舊路をたどり、夜山下のイルゼンブルグに至りて宿す。此地また谿流の勝あり。この國にてはすべてかゝるを瀑と呼ぶ。わが國の懸瀑飛瀑の壯觀に慣れたる目は、谿流の奔湍噴激を瀑といふには少しく同じかぬる心地す。翌日更に六里を進みて、ハルツブルグの温泉場を一覽し、數々山雨の襲ふに逢ひ、夕四時十里の行程を馳せてゴスラアに着す。

ゴスラアはハルツ地方の首都なり。ホオヘンスタウフェンの宮居あり。

りし所の断礎猶尋ねべく、建築の一部はカイザルハウス(帝居)と名づけて、歴史館となり居れり。市役所をはじめとして、中世以來數百年の古建築多く、われらの投宿せしカイザルオルトも、古の身分調所といふ役所の建物を旅店となせるなり。カイザルハウスの大廣間に、獨逸歴史の一覽書館あり、庭樹蕭疎、山氣清爽、まことに懐古の場たり。今はこの地僅に一萬五千の入口を有して、普魯西の一邑たり。傍近の炭山のために繁榮を持續するのみ。

九月廿二日正午ゴスラアを辭してギラチンゲンに赴く。西南二十五里、こたびは志田吉江の二君に林君を加へて出迎はれ、ビスマルク塔に上り、ビスマルクの舊迹等を搜り、夜は志田君の宿に和食を饗せられ、快談夜半にいたり、明朝は志田林兩君も同行と決す。

ギラチンゲンの南十七里にカッセルあり、即ち一八六六年に滅びた

るハッセン大公國の首都たりし所にして、公園に美術館に、また宮殿に、むかしの盛なりし迹をといめたり。ことに其南二里なるキルヘルム岡なる離宮及園池の結構は、當年奢侈のほども見えてゆいしく、まことに中獨逸のならびなき土木なりけり。此岡の絶頂に高塔あり、塔上ヘルキユレス守護神の像あり、像内人を容る塔上の登臨、天風颯々、群山來り朝し、大原双眸に入り、雄心落々、乾坤を虚うするの概あり。カッセル今は人口八萬、普國陸軍及産業の要地たり。

此夕急行フランクフルトに向ふ。ギイセン、マアルブルグ二大學の所在地を過ぎ、五十里の行程三時半にして達す。市はメイン河上に在り、されば東普魯西なる同名の市と別たむため、メイン河上のフランクフルトといふ。人口二十六萬、實に西獨逸の大都會たり。一八六六年、埃に與して、普に敗られ、その自由市たりし位置を失うて、普の縣治に屬す。詩聖ギ

エテの生地として有名なり、今尙現に其家は存せり、地漸くライン河に近づきて、古くは羅馬時代の由緒あるを識り、新しくは獨の兵備の愈々密なるを見る、廿四日マインツ(人口七萬)に至りて、こゝに復たびラインに接しぬ、翌日河を渡りてキイスバアデンの大温泉場を一覽す、八萬の大都にて、バアデンバアデンの幽趣に乏し、この夕ライン河畔のリュウデスハイムに至りて宿す、葡萄酒の本地、廉にして且芳醇なり、山勢漸く迫り來りて、風景大にとゞのふ、人口五千の小邑なれども、ニイデルワルド山上に、獨逸國民紀念像あるをもて、高名なり、山は齒輪汽車をもて昇降す、海拔千尺、ラインの水面上七百五十尺、像は八十尺の臺上に建ち、右手に帝冠を捧げ、左手に花冠附けたる長劍を持せ、女神ゲルマニア三十五尺の銅像なり、神采奕々、英姿颯爽、霸氣空を凌がむと欲す、臺の正面には、キルヘルム皇帝を始め名將賢臣の隊列

の浮像あり、下に有名なるラインの術成の歌を刻む、その左右に軍神と平和の神と立ち、下にはレエヌス(ライン川)及モゼルラ(モオセル川)の假像あり、臺の右面には、軍陣出發の兵士家族に訣別するの浮像あり、子を慰ますの父涙を飲み、て子の手を握る母、夫に縋りて泣きくづをる妻、銃を肩にする父に取り、縋る子供、一面慘憺の圖人をして、出師の當日を想はしむ、左面は凱旋の光景、反映の妙を極む、一八七七年をもて工を起し、一八八三年に竣工せり、とぞ、そもラインとモオセルとは、獨逸西面の要害なり、殊には、獨逸帝國の興隆、西敵に克ちて、乃ち成れるものなれば、かゝる像の成れるは、意味の深きことならまし、學校以外の教育、子供以外、の教育は、獨逸のわきて、注意するところ、獨逸社會教育の一秘訣とは、知られたり。

八月廿六日朝この像を看了りて、午時汽船ラインを下る、此處より

ブレントに至る十七里の世は、兩岸直に山嶺時ち、處々の山頂に古城あり、所謂一片の孤城萬仞の山、以てラインの絶景を成す。葡萄の栽培の盛なるも亦驚くべし。山の耕し得る所は悉くその畑とせり。

午後四時コブレンツに着す。ライン、モオゼルの兩河はこゝにて合す。要害の地なり。その三角洲頭に、キルヘルム大帝騎馬の像あり。臺下の工事未だ全く成らず。颯爽たる雄姿北斗を睨し、清流の濱、翠山の下、武威もまことに張りぬべし。市は三萬の人口に、五千の軍隊あり。この夜、軍樂囀、嘯、肅々として、歩騎市中を練り行くもの、屢々、こゝもまた尙武の作業なほざりならずと、覺わたり。

九月廿七日、エムスにて志田林二君に別る。コブレンツの東四里の山峽、ライン河邊の温泉場なり。風光清麗愛すべし。夕方北馳二十里にして、ニベルンゲン歌の英雄、ジイグフリードの傳説を以て有名なる七峰山

下のキョエニヒスキンタルに至りて泊す。人口數千の小邑なれど、煙霞の客は絶えざるべし。黄昏時七峰の一なるベエテル山に登り、翌朝龍岩山(ドラッペンフェルス)に登る。いづれも齒輪鐵道の設あり。龍岩山には、ジイグフリードの古城あり。頽敗の迹なほよく、懐古の代を存す。ラインを下瞰し、北の方遙に大原を控へて、形勢雄偉なり。

七峰山の北三里、大鐵橋ラインをわたりてボン市に入る。大學あり、寺觀あり、人口五萬。其北十里にしてキョエルン市あり、人口三十六萬。實にライン地方最大の都會たり。有名なる大寺院は、六百年前の起工にかゝり、二十年前はじめて工を竣ふ。最近三十二年間の工費のみを以てするも尙九百萬圓に上るといふ。ゴチツクの尤も莊麗なるものにして、塔高五百三十尺。巴里のエッフェル塔(千尺)を除きて、歐洲最高の建築たり。内部の裝飾もまた觀るべし。寶藏には使徒の舍利を藏すること多し。セバ

ヌチアン尊者、グレゴリ尊者等、枯骨疊々、錦繡の裏に相駢ぶ、東西の迷信、其轍を同しうするを見るに足る、その他の寺院にも觀るべきもの少からず、新に構へたる城壁も、注意の値あるべく、おもはれたり、この市の由緒は紀元前三十八年に在り、北獨逸その他の都市の中世以後の創建なるに似るべくもあらず。

キ・エルンに二泊して、九月三十日アアヘンに赴く、キ・エルンの西方更に十六里、西方一帯の丘阜を隔て、直に比耳義及佛蘭西に界す、これも羅馬時代の由緒を有し、今は人口十四萬ありて、獨逸西疆の要地たり、また有名なる寺觀あり、紀元八百年、シャルマン大帝の即位式を行ひしをりの玉座、今もなほ存せり、寶藏に同帝の脛骨あり、市役所も歴史的に觀るべし。

この夕七時、停車場にて渡邊君にわかる、君は東獨逸に歸り、われは西

佛蘭西におもむく、このをり西行の汽車は比耳義までなり、巴里直行の汽車は夜半ならでは出でずといふに、再び市中に歸りて、時をすごさむと劇場に行く、ギョエテのクラゾを演じたり、九時半劇はつ、市中はやく寂寥たり、秋もやうく、すいみて長かりし日晷のいつしかに短くなりけむ。

夜十二時四十分、歐洲第一と稱ふなる東方直行汽車アアヘンを發す、去年九月はじめて獨逸に入りしをり過りし道などおもひいでつ、一年の遭逢、鐵路一百二十里程、夢路をたどりて、明くれば、十月一日、午前九時、秋雨のそぼふる朝に巴里の大都に着きぬ。

三吉野の春しあぐらしさながらの、

比體二首

三吉野の春しあぐらしさながらの、
櫻かさして妹待つらむ乎。

まつ妹を思ひ出ですや、刺す針の、

薔薇が香にかも、酔ひしるゝ人。

臨江錄

(上)

恭賀新年。去秋十月佛國に轉遊し、巴里の西郊散雲里サンクレンにト居す、矮樓三層疎樹を隔て、清音の寒江に臨む、尤も朝晴と暮雨とに可なり、此日半日の閑を得、漫筆數條遙に故國の辱交に寄す、亦諸君志業の發達開展を祈るの微意なり。

○世紀の争

或は云ふ、第二十世紀は既に至れりと、或は又云ふ、新世紀は一九〇一年正月元日に始まると、獨逸に於いては、去年皇帝の演說中一九〇〇年

を目して新世紀といふの語ありしより、一般に第二十世紀既に至れりと爲し、新世紀など書に書にせる繪葉書類の彼國より至る者數、なり、佛國にも二説あれど、多數は獨逸に反對する説なり、百十萬の發刊高を有する「小新聞」の如きは、數、熱心に之を論せり、維廉二世髯を捻りて一喝すれば、世紀の至ること一年を早うす、昔者カニウット王海潮を叱斥して而も得ず、星宿を靡きて能くする大皇帝に比すれば、何を其讓れる、紐育へラルドが尊號を上りて、*The gurrand Kaiser* といへる、亦宜なるかな。

○學生微言

客歲西航してより、歐洲學生の美風如何といふ問を受けたること一再、佛は吾未た之を知るに至らざるを以て、暫く獨を以て之に答へたりき、其要に云ふ、伯林の書生、ギムナジウムに於いては、其二級下(滿十五才以上)に至るまで、全く小兒扱にせられ、人皆「お前」というて、あなたといは

ず、二級上以上よりして、あなたの大人扱を受く、されど校規嚴格にして、髯の生ひかゝれる生徒共、めそ〜として處女の如し、此校を卒ふるや、國の試験を受け、之に及第して卒業生の資格を得、此資格ある者は直に大學學生となるを得、獨逸にて眞に書生といふべきは大學學生及相當學校の學生なり、(右の小兒扱の折は、名を呼ぶにもオットオ、ロオレンツなど名を呼び棄にす、大人扱といふに至りて、俄にへア、フオンピスマルク、へア、フオンスタイン、玉井君、長澤君といふ類に相當するなり)

伯林大學學生の風は、概して遊惰なり、恰も我早稻田、法學院と見て適當ならむ、濟生學舎は少々酷なるべし、到底我大學高等中學等に比すべくもあらず、彼等は始めて校規等の束縛を免れ、一人前の男として學界に立つ者故、大學學生期を尤も氣樂なる時期と思做す、乃ち麥酒を飲み、歌を唱ひ、皆俱樂部組合を有し、決闘を行ひ、學業は第二の事と爲る、彼等

學資受領の方法は、大抵月百馬ポ乃至二百馬と定額の仕送りを得、而して聽講料は別途會計として父兄より受領す、是れ獨逸大學の制、一週四時間以上、滿六學期即三年以上聽講の事實、聽講臺帳によりて證明せらるゝに非ざれば、學士候補生カシガダとなるを得ざるが故に、學生は競うて多額の聽講料を父兄に要求し、一は以て父兄に對して勉強を装ひ、一は他日受驗の際の爲に履歷を飾る、而も其大に聽講に出席するは、講義の始と終と、即ち教授の署名を臺帳に受くるの時にして、不熱心者は平生必ずしも出席せず、

大學學生も、人と應接するときなどは、丁寧向の描撫聲をなす、是れヤムナジウム以來の養成なり、此描撫聲は、獨逸の特産ともいふべくして、我國の高朗透徹せる音聲は、彼國に於ける邦人社會には、蠻音として擯斥せらる、彼國にて數人の會合あるや、此處に一組、彼處に一組、ひそく

話するが常にして、我國の會合、一人話すときは滿座肅聽すると同しからず、

學生組合は時を定めて麥酒會を催す、ブランデンブルグ組合と稱するに、吾亦客員として數回參會せり、日曜の十一時よりにして、二時頃の晝食は、するとせぬと勝手なり、此會には、會員親戚知音等の若き婦女を誘ひ行く、凡そ彼國の婦女は、愛嬌をこぼし、手取なること我國の藝妓と異ならず、かゝる會に婦女の列席を歓迎するは、藝妓を揚ると毫も異ならぬ動機なり、若し高尚なる談話をなさむと欲せば、婦女は到底彼等大學生の修養に如がざればなり、故に彼國學生は、錢いらすの藝妓買を一般の風、寧ろ美風として盛に行ふものと知るべし、此會には顔に癩痕ある者の取分けて得意顔なるは、所聞に違はず、

錢のいる藝妓買も、彼等の敢て辭せざる所なり、所謂女の居る出張す